
第二次次元世界大戦

神々の創造者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第二次次元世界大戦

【Nコード】

N2178K

【作者名】

神々の創造者

【あらすじ】

あの“三大将”がミッドチルダに漂流した！

作者からの報告

？ユニークが3万人達成& amp; p; PV20万アクセス突破しました！

？本日「9/9」、『『三大将』のミッドチルダ漂流記』 第二

次次元世界大戦』へのタイトル変更

00：漂流（前書き）

やってしまった（汗）

チート三人衆がなのはの世界に介入してしまった（汗）

大丈夫だろうか？

00：漂流

《海軍本部》

(だるい。)

青雩はいつもと同じだ。

「何か面白い事でも起きないのかな。」

黄猿はとんでもない事を言った。

「どつせ、起きても僕らの出番じゃねえからの。」

赤犬もとんでもない事を言った。

すると、部屋に蒼白い閃光が輝いた。

「ん？なんだありゃ？」

「くっ！眩しいぞ！」

「見えない！」

蒼白い閃光が三人を包んだ。

・
・

・
《ミッドチルダ》

首都から離れた郊外

「大丈夫か？」

赤犬が安否を確認した。

「大丈夫だ。」

「わっしは大丈夫だよ。」

赤犬は周囲を観察した。

「どうやら、マリンフォードじゃねえな。」

「そうっすね。」

「ん〜。厄介な事になったねえ。」

その時、カプセル型の”何か”が現れた。

「喧しいの。大噴火！」

マグマとなった右手で一気に溶かした。

「八尺瓊の曲玉」

光の弾を放つ。

青雉は近くに生えた草をちぎった。

その草に息を吹き掛けた。

「氷河軍刀【アイスサーベル】」

氷の刀で切り裂いた。

「しょせんは雑魚か。」

赤犬はそう呟いた。

・
・
・

その頃、管理局の白い悪魔 高町なのはが次元震の調査に来ていた。

「なのはちゃん！気を付けて、ガジェット反応があるよ！」

上司で親友の八神はやてから新たな情報が伝えられる。

「うん！」

なのはは急いで向かった。

もし、次元漂流者に何かあったら大問題になってしまう。

しかし、なのはが駆けつけた頃にはガジェットはいなく三人の男は無事だった。

「時空管理局です。あなた方の身柄を保護します。」

《機動六課・部隊長室》

「機動六課課長、八神はやてです。」

「機動六課スターズ分隊長、高町なのはです。」

「機動六課ライティング分隊長、フェイト・T・ハラウオンです。」

「俺は青雉。本名はクザン。」

「俺は赤犬。本名はサカズキ。」

「わっしは黄猿。本名はボルサリーノ。」

互いに自己紹介した。

「ところで、ここはどこだ？」

青雉がはやてに尋ねた。

「ここはミッドチルダです。」

「分かった。礼を言う。」

「いえ、とんでもないです。」

「あなた方に聞きたい事があります。」

フェイトはそう言って、モニターを操作した。

フェイトはなのはからいろいろと証言を聞いた。

モニターには先程の戦闘の様子が写し出された。

「これは一体、なんですか？あなた方は何者ですか？」

フェイトは三人を睨み付けながら尋ねた。

「儂らは”悪魔の実”を食った能力者じゃ。」

「」「悪魔の実!？」」「」

「悪魔の実つてものは、見た目は果実だが食ったら凄まじい能力を手に入る。」

「そんな恐ろしいものがあつたんか。」

「ただし、そいつを食った人間は一生力ナツチになる。」

「まあ、弱点はあつて当然やる。」

はやては妙に納得した。

「悪魔の実際の系統3つ。”超人【パラミシア】系”、”自然【ロギア】系”、”動物【ゾオン】系”わっしらは、最強と言われる自然系の能力者だよ。”

黄猿が詳しく説明した。

「見せてもらえますか？」
「なのは赤犬に尋ねた。」

「別に構わないが。」

赤犬は承諾した。

「じゃあ、見せてもらおう！」

「うん！FW陣とのコンビネーションが思い浮かびそうだよ。」

だが、この事が後に機動六課と三大将との溝を生じる事になるとは誰も思わなかった。

00：漂流（後書き）

六課との溝ってなんでしょうかね。

お楽しみに〜！

01：三大将の実力 part A（前書き）

三大将の実力を押し量る事にしたはやて達であった。

しかし、そこで大問題が起きてしまった！

01：三大将の實力 part A

《機動六課・訓練場》

「えっと。今日から皆と一緒に六課で働く人たちを紹介します。」

なのはは三大将をFW陣に紹介させたかった。

「クザンだ。気軽に青雉って呼んでくれ。」

「サカズキだ。赤犬って呼んでも構わん。」

「ボルサリーノだよ。わっしも黄猿って呼んでくれよ。」

(なんで?!あの人たちがここに?!)

「おや?キャロちゃんじゃないかい?」

「お久しぶりです、黄猿さん。」

「元気そうだな、安心したよ。」

「まったく。心配したぞ。」

青雉と赤犬からいろいろと文句を言われたキャロ。

「それに、”茜髪”ティアナ・ランスタール。」

「お初目にかかります。義父よりあなた方の事を聞きました。」

「…そうか。なら、手加減は出来ないな。」

「…じゃあ、スバルから自己紹介してね。」

「はい！スターズ分隊03、フロントアタッカーのスバル・ナカジマです。」

「スターズ分隊04、センターガードのティアナ・ランスターです。」

（なるほど。正体が分からなくしていたか。あえて、”シルバーズの姓を名乗らない事にしたか。”）

「ライトニング分隊03、ガードウィングのエリオ・モンディアルです。」

（エリオ・モンディアル？はて、どっかで聞いた名じゃな。）

「改めまして、ライトニング分隊04、フルバックのキャロ・ルルシエです。」

「さて。自己紹介も済んだところで、早速訓練に入りたい所だけどもまずは軽く模擬戦してみようか？」

「「はい！」」

「……はい。」

「……………」

キャラだけが元気がなかった。

ティアナは返事せずに黙り込んだ。

それは三大将の恐ろしさを知っているからである。

（スバルさん達には申し訳ないですが絶対に勝てません。なのはさんやフェイトさんでも勝てません。ヴィータ副隊長やシグナム副隊長でも勝てません。）

キャラは右手に付けた腕輪を見た。

（ごめんね。今まで、優柔不断で。でも、あの人たちに強くなった事を示したい。）

三大将とFW陣の模擬戦が始まるうとしていた。

「それじゃ、行くよ！Ready、Go！」

模擬戦が始まった。

「じゃあ、俺は寝ます。」

青雉はいつもと同じだった。

ビルの中で寝てしまった。

「黄猿。後はお前に任せる。」

赤犬は端からやる気がなかった。

傍観者として見届ける事にした。

「やれやれ、困ったねえ。」

黄猿はそう呟き、歩き始めた。

（隊長陣 side）

「うわあゝ。コンビネーション悪いぞ。」

ヴィータがそう指摘した。

模擬戦に対してやる気がない人たちかと思っていたが黄猿だけが仕方なく引き受けた事に許した。

「主はやて。彼らは一体何者ですか？」

「悪魔の実の能力者やって。」

「悪魔の実ですか?!」

シグナムは異常な反応をした。

「ちっ。厄介者だな。」

ヴィータも顔を苦くした。

ヴォルケンリッター（守護騎士）である彼女らは理解していた。

悪魔の實の恐ろしさを。

）side・out）

）FW陣side）

『キャラ。あの人たちは一体何者なの?!』

『”三大将”って言われている最強の三人です。』

『大将?!でも、ミッドじゃレジアス中将が最高指導者なんですよ?』

スバルが疑問を投げ掛けた。

『昔、私がいた世界には元帥が最高指導者なのです。その下に大将がいます。あの人たちは”海軍”と言われる軍隊の最高戦力なのです。』

『……………。』

『とにかく、分散して当たるのよ!（まとまったら、こっちに勝ち目がない!）』

『『はい!』』

）side・out）

黄猿は廃墟ビル群を歩いていった。

「すごいねえ。」

呑気な黄猿であった。

その近くではティアナが狙撃のチャンスを窺っている。

「（ ” 三大将 ” か。父さんから聞いたけど。本当に私の力が通用するのかな？）ヴァンブル、シュート！」

魔力スフィアが放たれた。

（直撃コース！！）

ひたすら、願った。

しかし、スフィアは黄猿の体を貫通した。

（これが自然系の回避力なの！？）

ティアナは啞然とした。

（くっ！やはり簡単にいかないのか！）

「速さとは重さ。…光の速度で蹴られた事はあるかい？」

黄猿はいつの間にか、ティアナの背後にいた。

ティアナは振り向くが、黄猿に蹴られた。

ドドドドオーン。

そんな音を立てながらビルを貫通していく。

「我流体術、”彗星”^{コメント}」

ティアナが無傷で帰還してきた。

「来たねえ〜。”茜髪”の片鱗が。」

「まだ、これからです。」

ティアナの目には挑戦者としての熱意が籠もっていた。

（隊長陣side）

「「「……………」」」

なのは達は黄猿の速さに言葉をなくした。

「なんや、あれは?!全然見えへんかった。」

見える訳がない。

知っている人も多いが、黄猿は自然系ピカピカの実の光人間である。

一般教養では光は秒速30万?進む。||一秒間に地球を七周半も進

む。

と教わってもらったはず。

尋常すぎる速度で”蹴られた事はある”って誰も言えない。

むしろ、”蹴られた事はない”って答えるしかない。

「あれが黄猿さんの強さなの？」

「っ！」

なのはが疑問視している。

横にいたフェイトは唇を噛んだ。

フェイトは管理局随一の速さ（音速）の持ち主。

しかし、黄猿は光速。

自分は太刀打ち出来ない。

（side・out）

黄猿はティアナと対峙する事にした。

「勝負です！」

エリオも勝負を申し込んできた。

「困ったねえ。わっしを倒す事が出来るのかねえ。」

「やってみないと分かりません！」

「私は微妙なところです。」

「あまのむらぐも
天叢雲剣」

巨大な光の剣を出した。

「タアアア〜！」

「我流剣術第四手、月牙！」

エリオは自慢の突貫をティアナは得意の斬撃を繰り出す。

ガキッ

カン

ズバツ

黄猿の剣はかなり大きいのでエリオのストラダを押し勝っている。

「っー！」

エリオの片膝が地面についた。

「あれっ？おつかしいねえ〜。もう、お陀仏かい？」

「ハアハアハア…。」

黄猿はエリオを指差した。

指先から光が出て、レーザーが放たれた。

レーザーがエリオの横を通りすぎる。

「エリオ！」

スバルが援護に駆けつけたが

「アイスタイム」

青雉がスバルの手を掴んだ。

すると、スバルは全身が凍り付けになった。

「隊長陣side」

青雉の能力に啞然とした。

「あれは、なんですか?!」

六課の部隊長補佐のラインフォース？は驚いた。

「スバルが凍り付けになってもうた。」

「なのは！もう終わりにして！」

「うん！」

この決断によって模擬戦を終了した。

《機動六課・ロビー》

三大将ははやて達から尋問を受けていた。

「なんだねえ。わっしらは何をしたと言っのかねえ〜？」

黄猿の威圧感にははやて達は冷や汗をかく。

「あなた方は何者なんですか？」

「ひどいなあ。さっきの君たちが見たかった悪魔の実の能力でしようが。」

「あんな一方的な戦いをあなた方はするのですか？」

はやて達は三大将の戦闘を見てティアナ達が太刀打ち出来ない状況に怒りを表した。

「そこまで言うならお前たちの実力を見せてもらっじゃないか？」

赤犬がはやて達に提案した。

この提案が更に、六課との関係が悪化する事になるのである。

01・三大将の実力 part A (後書き)

やっぱ、三大将はチートすぎるでしょう(汗)

このまま、悪くなるかな？

どうでしょうorz

02：三大将の實力 part B（前書き）

赤犬の提案で隊長陣と模擬戦する事になった。

隊長陣 vs 三大将

02：三大将の實力 part B

《機動六課・ロビー》

なのはとフェイトが相手するのは赤犬と青雉の2人である。

黄猿は副隊長とFW陣と共に見学する事にした。

はやては聖王教会に向かった。

「それじゃ、行きます。Ready、Go!」

「レイジングハート!」

【アクセルシューター】

36個の誘導弾を撃った。

「じゃがしいのう。」

赤犬の右手の変化に皆が啞然とした。

何故なら、赤犬の右手がマグマになっていた。

誘導弾が赤犬に迫る。

「大噴火!!!」

マグマを噴出した。

誘導弾を破壊しながらなのはにマグマが迫る。

【ソニックムーブ】

フェイトの音速でなんとか救出された。

「ちっ！ややこしいのう。」

「アイス塊フロック」

空中から青雉が仕掛ける。

「バルチザン両棘矛！！」

矛型の氷がなのはとフェイトを襲う。

「くっ！」

フェイトも誘導弾を撃って応戦する。

【デイベインバスター】

なのはの砲撃が青雉は直撃した。

青雉の体が粉々に散った。

（見学者side）

「(なのはの奴!馬鹿な事をしやがった!)」

グイータは内心で、パニック状態になっていた。

「どうしましたかねえ〜。」

「い、いや!なんでもねえ!」

「:彼女らは、青雉を舐めていますねえ〜。そんな事が、『無駄』だと知らずにねえ〜。」

黄猿はグイータを一瞥して訓練の様子を見届けた。

side・out

「やったね!」

「うん!」

なのはとフェイトは喜びを分かち合った。

「ああ〜。酷い事をするんじゃないの。」

「えっ?」

振り向くと、氷から青雉が再生し始めていた。

「どうした?それが全力か?お嬢ちゃん。」

青雉はなのは達に尋ねた。

なのは達は言葉をなくした。

青雉は近くに落ちていた鉄パイプを拾って息を吹きかけた。

アイスサーベル

「氷河軍刀。命を取る気はなかったが、お前らここで死ね。」

氷の刀が振り下ろした。

2人は目を瞑った。

だが、痛みが来なかった。

「……………」

キヤロが天叢雲剣で受け止めた。

よく見ると防護服が展開されていないなくて、六課の茶色の制服だった。

「「キヤロ?!」」

「青雉さん。そこまでにしてください。」

「んまあゝ。そうだな。キヤロちゃんが相手してくれるならお前の上司には手を出さない。それでいいですよね、赤犬さん。」

「ああ、いいだろう。成長ぶりも楽しみじゃのう。」

「では、行きます!」

「アイス塊、フェザインドベック暴雉嘴!」

巨大な氷の雉が襲いかかる。

「ロード：メラメラ：鏡火炎！」

火の壁で相殺した。

「アイス塊、両棘矛！」

「陽炎！！」

火vs氷の対決は激戦化とした。

「大噴火！」

赤犬のマグマが迫る。

「……………」

マグマに飲み込まれた。

「キャロ〜！！」

フェイトの叫びが訓練場中に響いた。

「喚くな。キャロちゃんはそう簡単に死なないぞ。」

マグマから青白い炎が出てきた。

よく見ると、鳥の翼だった。

「ロード：トリトリ・モデル不死鳥」
フェニックス

不死鳥となったキャラの姿だった。

「不死鳥”キャラのお出ましたな。アイス塊、暴雉嘴！！”

青雉の攻撃を受けても、キャラは進撃を止めなかった。

キャラの蹴りは惜しくも止められた。

「おっと！効くじゃねえか。」

青雉は後退した。

キャラも後退して、様子を窺っている。

「見学者side」

「なんだありや?!」

「わつしら自然系より希少な種。動物系”幻獣種”。”不死鳥”キヤロだねえ。キャラちゃんあの腕輪は複数の悪魔の実の能力が封じ込まれている。キャラちゃんはそれらを上手く使いこなせている訳だよ。」

「「……………」」

「side・out」

「ほうく。なかなか使いこなせているじゃねえか。」

「恐縮です。」

「もう良いだろう。」

赤犬の提案で模擬戦が終了した。

《機動六課・メンテナンスルーム》

キャロは腕輪【悪魔の腕輪】を六課のデバイスマイスターであるシヤリーに見せた。

「これがキャロのもう一つのデバイス、じゃなさそうねえ。」

「正式に言いますとアーティファクトです。」

「宝具って事？」

「はい。」

「ごめんね、ありがとう。はい、返すね。」

その後、キャロはシャワーで汗を流した。

「しかし、キャロのあの姿は格好良かったなあ。」

「そうですね？」

「キヤロ。あなたは悪魔の実をいくつ使えるの？」

「8個です。」

「8個も使うの?!」

「はい。」

・
・
・

キヤロ達がメンテナンスルームで新デバイスの説明を受けている頃、突然アラートがなった。

「このアラートって一級警戒体制?!」

「グリフィス君！」

「はい！教会本部からの出勤要請です！」

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君！こちらはやて。」

「うん！」

「状況は？」

「教会の調査団が追っていたレリックらしき物が見つかった。場所

はエイリ山岳丘陵地帯。目標は山岳リニアレールで移動中。」

「移動中って」

「まさか！」

嫌な予感がした。

「そのまさかや。内部に侵入したガジェットのをせいでリニアレールのコントロールが奪われている。リニアレール車内のガジェットは、最低でも30体以上。大型や飛行型の未確認タイプが出てるかも知れへん。」

嫌な予感が的中した。

「いきなりハードな初出勤や。なのはちゃん、フェイトちゃん、行ける？」

「私はいつでも。」

「私も！」

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。皆もええか？」

「……はい！」「……」

「よし、ええお返事や。シフトはA-3。グリフィス君は隊舎での指揮。リインは戦闘管制。なのはちゃんとフェイトちゃんは戦闘指

揮。」

「わかった。」

「うん！」

「ほんなら、機動六課FWメンバー、出動！」

「「「「了解！」「「「「「

「了解！」

このリニアレールでの出動でキャロの真価が試される。

02：三大将の実力 part B（後書き）

いよいよ、リニアレールです！

しかし、原作とはちょっと違う展開になりそうorz

3月16日：本文の一部を修正

03・三大将のファーストアライト（前書き）

暴走リニアレールでの初任務。

FW陣はかなりの緊張感を持っていた。

しかし、キャロにはまた別の感情があった。

03：三大将のファーストアライト

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習どおり大丈夫だからね。」

ヴァイスが操縦するヘリで現場に向かっている。

F W陣の緊張を解かそうとなのはがそんな風に話しかけてきた。

「はい。」

「頑張ります。」

「出来る範囲で頑張ります。」

「エリオとキャラもすっかりですよー！」

「は、はい！」

「危ない時は私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから。おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう！」

「はい！」

「……………」

キャラはずっと瞑想している。

全力でやると、なのは達にも被害が及んでしまう可能性がある。

それを回避するための最善策を思索していた。

「ガジェット反応!?空から?!」

「現地航空観測隊、反応多数を確認!」

「空から?!もしかして、航空型のガジェット!?!」

「どうします?なのはさん。」

「私がフェイト隊長と出て、2人で空を抑える。」

「うつつ。なのはさん、お願いします!」

へりのメインハッチが開き、なのはがそっちに向かっていく。

「じゃあ、ちょっと出てくるけど。皆も頑張ってズバツとやっつけ
ちやおっ!」

「「「はい!」」」

「...はい!」

瞑想のせいで返事が遅れたキャロになのはがちよつと微笑んだ。

「...大丈夫。離れていても通信で繋がっている。一人じゃないから。
ピンチの時は助け合える。キャロには魔法以外に凄い能力があるだ
から。皆を守ってあげれる頼もしい能力ちからなんだから、ね?」

「…はい！」

「いい返事。じゃあ、行って来るね」

なのはは、メインハッチから大空へ身を躍らせた。

「任務は2つ。ガジェットを逃亡させずに全機破壊する事。そして、レリックを安全に確保する事。って、青雩さん！寝てないでちゃんと聞いてください！」

リンはアイマスクを付けて熟睡している青雩に叱った。

「んあ？要するに、レリックって言う物を回収すれば良いだろ？」

「…はいです。ライトニング分隊とスターズ分隊はそれぞれ前後に分かれて中央を目指します。レリックは此処、7両目の重要貨物室に置かれています。」

モニターで重要貨物室を映す。

「いかにも。重要貨物室って感じだな。」

「貴方は黙っていてください！はい、えっと。スターズかライトニング、どちらか先に到着した方がレリックを確保するですよ！」

「…はい！」「…」

「それで…。」

リインは身体を白銀の光に包みながら一回転して騎士甲冑を纏った。

「私も現場に降りて、管制を担当するですよ。それと青雩さん。」

「なんだ？」

「青雩さんはライティングの2人と「必要ない。」…なぜですか？」

「キャロちゃんも俺達からの指令でも動かなかった。あくまでも自分自身の考えでしか動かない。例え、上司であるお前たちからの指令でも。それに、キャロちゃんがおればライティングの2人は大丈夫だろ。」

「それだけですか？」

「ああ。」

「分かりました。青雩さんはスターズの2人と一緒に行ってください。」

「了解した、リイン曹長。」

「よし、新人共。隊長さん達が空を抑えてくれるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか?!」

「「「「はい!」」」」

「スターズ03、スバル・ナカジマ。」

「スターズ04、ティアナ・ランスター。」

「「行きます！」」

スターズの2人がメインハッチから飛び降りた。

「青雉の旦那！あのバカ2人をよろしく頼みます！」

「ったく。面倒くせえがやってやるか。」

青雉も2人の後に続いた。

「次、ライトニング！気いつけてな。」

「「はい！」」

「ライトニング03、エリオ・モンディアル。」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエ。」

「「行きます！」」

こうして、FW陣の初任務が開始した。

リニアレールの屋根に降りたFW陣。

防護服のデザインを見て、それぞれ感想を言っていた。

キャラは不死鳥になって、航空型ガジェットを殲滅に向かってしまった。

ティアナはリンに文句言ったが、青雫が理由を言ってもなおティアナが怒った。

「キャラは勝手すぎます！チーム戦なのに、勝手な行動をする。」

「ティアナさん。」

いつの間にか、キャラとなのはとフェイトが降りて来た。

「ティアナさんは私がそんなに嫌いですか？」

「ええ。大嫌いだよ！勝手すぎ行動を起こす。青雫さん達とやり合える実力を持つ。私はそんなキャラが羨ましいのよ！」

「ロード：ニキュニキュ」

キャラの掌に肉球が現れた。

「^{バッド}圧力砲」

光速で弾かれた空気が衝撃波として放たれた。

「がはっ！」

「ティアー！！！」

「「ティアナ!!!」」

「「なんや?!何があつたんや!?!」」

はやてが慌てた様子で通信してきた。

「八神部隊長。今、エリオ君がレリックを回収に行ってもらっています。」

「それは良かったなあ。」

「あつ、エリオ!」

スバルが見た先には、エリオと大型ガジェットが対峙していた。

「エリオ君!!!ロード・ヤミヤミ、ブラックホール闇穴道!!!」

大型ガジェットはキャロの間に引きずり込まれた。

リベレイション
「解放!!!」

思いっきり吐き出した。

すると、見事に粉碎されていた。

「ふう〜。あつ、エリオ君!大丈夫だった?」

「ありがとう!ほら、レリックも回収出来たよ。」

「それじゃ、ライトニングの2人はこのまま本局まで護送で良いよね フェイト隊長。」

「うん。スバルは現場待機。地上部隊の引き続き処理をお願いね。ティアナはヘリで六課まで送らないといけないね…。」

「了解!」

スバル達のそばで気絶しているティアナを見たフェイトは虚しい顔をした。

《機動六課・部隊長室》

はやてはリンからキャロの勝手すぎる行動についていろいろと聞いていた。

「まさか、ここまでとは。」

「どうしましたか？主ははやて。」

「ちょっとな。キャロが勝手すぎるんよ。このままだとFW陣として連携が最悪になってしまふんや。」

「それは大問題です。」

「このまま、事件が急展開を見せたら正直ヤバいかもな。」

はやてとシグナムはキャロの勝手すぎる行動に頭を抱えてしまう。

しかし、キャロの勝手すぎる行動にはある”目的”が隠されていた。

はやて達はその目的をまだ知らない。

いや、はやて達”だけ”には知って欲しくなかった。

03・三大将のファーストアライト（後書き）

原作破壊してしまったorz

ヤバい展開が予想されるぞ、これはorz

次回をお楽しみに！

04：進展 part A（前書き）

リニアレールの初出勤で訓練に熱が入る。

だが、そこでティアナの過去が明らかとなってしまっただった。

04：進展 part A

「5月13日

部隊の正式稼働後、初の緊急出動がありました。密輸ルートで運び込まれた古代遺失物ロストロキア【レリック】をガジェットが発見、輸送中のリニアレールを襲撃、それを阻止。【レリック】を回収するという任務でしたが、六課前線メンバー一同、民間協力者の青雉さんのお陰で無事解決。少々問題は起きてしまいましたが、今後の任務に支障なし。確保した刻印ナンバー？の【レリック】は現在、中央のラボで保管・調査中。初任務にしては良い滑り出しだ、と部長のはやてちゃん、六課の後見人の騎士カリムやクロノ提督達も満足されているようです。『…と。』

リインは日課としている業務日誌を記載していた。

「リイン曹長。」

そこに、シャーリーがやってきた。

「あつ、シャーリー！」

「ご休憩中ですか？」

「休息半分、お仕事半分。個人的な業務日誌をつけてたですよ。」

リインがそう言うと、パネルを消した。

ふわっと空に浮かび上がり、シャーリーの元に駆け寄る。

「ああ、なるほど。」

と、シャーリーは納得した。

「シャーリーは？」

「新しいデバイス達の調子を見に、訓練場の方に行ってきたんですよ！」

「へえ、そうですね。皆、元気でした？」

それに、シャーリーは相槌を打ち

「FW陣もデバイス達も、もう絶好調！」

と笑みを浮かべてそう言った。

《訓練場》

擬似データで作られた森林地帯が訓練場にしており、FW陣はそこで訓練していた。

実は、今日から個別教導が行われている。

スバルはヴィータと。

ティアナはなのはと。

エリオとキャロはフェイトと。

のはずだが、ティアナは外せない用事があって訓練に来ていない。

ティアナ曰く、「今日1日”家”でやりたい事がありますので。ですが、なのはさんの教導は絶対にサボりません！」との事。

それに、なのはは「にやはは。大丈夫だよ？外せない用事なら行って来ても良いよ」と快諾した。

三大将はヴィータの教導を見学する事にした。

（スバル& amp; ヴィータside）

「オラッ！いくぞッ！」

ヴィータが叫ぶと同時に地面を蹴り、スバルに向かってグラーフアイゼンを振りかぶる。

スバルのトレーニング着はかなりボロボロだった。

「マツハキャリバー！」

【プロテクション】

相棒の名を呼び、それに答えるように青いクリスタルが輝きを増す。

リボルバーナックルのナックルスピナーが高速回転する。

その回転により青いバリア系の防御魔法を発生、展開させる。

次第に、スピナーの回転数が増してより強固なものにしていく。

ヴィータはグラーファイゼンを大きく振りかぶり叩きつける。

ゴウツ！！

という音が響き渡り、両者は激しくぶつかり合う。

火花を散らし、同等ように思えるがそれは見た目だけである。

次第にぐんぐんとスバルは押されていく。

漏らす声と同時にヴィータの一撃が再びスバルを襲いかかった。

ズザザ！！

とその一撃はスバルごと数十メートル離れた木の場所まで吹き飛ばした。

ヴィータは何かを納得したかのように言う。

「なるほど。やっぱ、バリアの強度の方はそんなに悪くねえな。」

「えへへ…。ありがとうございます。」

「お前やあたしのポジション、フロントアタッカーはな…。」

とヴィータは話を続ける。

「敵陣に単身で切り込んだり、最前線で防御ラインを守ったりが主な仕事だ。防御スキルと生存能力が高い方が攻撃時間を長く取れ、それが最重要となる。それにサポート時に頼らないで済む。ってこれはなのはから教わったな？」

「はい！ヴィータ副隊長。」

「受け止めるバリア系、弾いて反らすシールド系、身に纏って自分を守るフィールド系。この三種を使いこなしつつ、ポンポン吹っ飛ばされねえように下半身の踏ん張りやマツハキャリバーの使いこなしを身に付ける！それがこの訓練の目標だ！」

「はい、頑張ります！」

「さすがだな。元ロジャー海賊団特攻隊長、”紅き鉄鎚”ヴィータ。 ”冥王”レイリー並の覇気の使い手で世間の海賊共からは”女将”と慕われている事があるな。」

青雉がヴィータの過去を一部をバラした。

「えっ？副隊長って海賊だったのですか？」

「ああ。しかもキャラ口と同じ、悪魔の実の能力者だ。」

「ええ〜！副隊長も能力者ですか？」

「ああ。グラグラの実を食った地震人間だ。例えば…」

ヴィータは拳に力を込めて大気を殴る。

すると、大気にヒビが入った。

〈ライトニング side〉

離れた場所では、フェイト達の訓練が行われている。

現在、フェイトが用意した器具である【回避トレーニング用ステーション】がある。

複数のオートスフィア、障害物が設置されている。

「エリオとキャロはスバルやヴィータみたいに頑丈じゃないから。

反応と回避が最重要。例えば…」

話を区切り、フェイトがオートスフィアを見やるとスフィアが黄色く輝き始める。

スフィア全体を包み込み、展開。

そこからフェイトに向かって、青い光弾が放たれた。

「こっやって…」

軽いバックステップでそれを回避。

速度はそれほど速くもないためにフェイトは軽々と回避。

エリオとキャロはそのフェイトから目を逸らすことなく、真剣な眼差しで見つめる。

「まずは動き回って、狙わせない。」

言葉と同時に、フェイトはジグザグに走り回る。

スフィアはフェイトの追跡に動き出し、青い光弾を発射。

それを横へ移動してかわす。

「これを低速で確実にできるようになったら…。」

勢いよく走りだす。

「スピードを上げていく。」

先程とは打って変わり、複数のオートスフィアから放たれる光弾が段違いの速さで射出。

まるで、マシンガンに似た連射だ。

フェイトに向かって放たれた光弾は次々と彼女に襲いかかり、集中砲火を開始した。

バンバンという小さな爆発音が響き渡り、追い込んだところで左右のスフィアから一斉射撃。

ドゴオオン！という爆発音。

それは間違いなく前より威力とは段違いだった。

エリオとキャラロは”フェイトがやられた。”と思った。

しかし、

「こんな感じにね。」

背後から声が聞こえる。

ふと、振り返ればそこにはフェイトの姿があった。

たしかに、スフィアの攻撃はフェイトの姿を捉えていたはずだ。

なのに、無傷かつ服の汚れ一つもない。

驚きの表情を浮かべながら、2人は先程の場所に振り返る。

砂煙が晴れるとその場所には土が抉られていたのだ。

さらに、それはちょうどフェイトの立ち位置から線のように繋がっていた。

「「凄い…。」」

その時、訓練場に地震が襲った。

「これは?!」

フェイトは地震の発生源に向かった。

すると、ヴィータとスバルに三大将がいた。

「今のは？誰が起こしたの？」

フェイト達だけではなく、なのはとシグナムも駆け付けた。

「ヴィータ。もう隠す必要はないだろう？ティアナを六課に引き込むように主はやてに頼んだだろう？」

「……………ああ。あたしがティアナを六課に引き込むようにはやてに頼んだ。」

「どうしてなの？ヴィータちゃん、ティアナの何かを知っているの？」

「その質問なら私が答えるね。」

「主はやて。」

「はやて…。良いんだ、あたしが答えるよ。ティアナには兄がいたのは、スバルも知ってるだろう？」

「はい。ティータ・ランスターさんの事ですよね？でも、数年前に殉職。ティアはそのお兄さんにとても可愛がられていました。」

「その事が起こった後、あいつがティアナを自分の養子にしたんだ。そいつの名は…」

元ロジャー海賊団副船長、”冥王”シルバース・レイリー。あたしと共に海賊王ゴール・D・ロジャーの船で”偉大なる航路”グランドラインを乗り越えた仲間の一人だ。”

「ゴール・D・ロジャーってあの”海賊王”ゴールDG・ロジャーじゃありませんか!？」

キヤロが声をあげた。

「そつだ。そこの三大将がまだ中将だった頃だな。」

「懐かしいっすね、女将?」

青雉がヴィータに問いかけた。

「あの頃はな、ロジャーの野郎が体を悪くしてたから。”もう無理だ”と思ってたグランドラインを制覇したからな。やがて、ロジャーが自首しあいつの生まれ故郷のローグタウンで処刑された。なにもかもが懐かしいな。」

「凄い話を聞いたかも。」

フェイトは啞然とした顔になった。

「“冥王”と“紅き鉄鎚”が実在していたなんて。」

「しかも、“紅き鉄鎚”はヴィータ副隊長の異名だなんて。」

「ティアナなら、多分レイリーの所だろう。あいつは今、船のコーティングを仕事にしているからな。」

「その場所は？」

「場所はこの紙に書いてある。後で行ってきな。」

ヴィータはそう言ってレイリーの住所が書いてある紙をなのは達に渡した。

04：進展 part A（後書き）

ヴィータが異常に格好良いつすけど（＾　＾）

今回はワンピース原作キャラが登場します！

お楽しみに（．．）

05：進展 part B（前書き）

はやて達は恩師である陸士108部隊隊長のゲンヤの元を訪れた。

一方、ヴィータ達はティアナを迎えに行くため、とある酒場に入る。

05：進展 part B

はやては陸士108部隊に向かおうとリインと共に歩いていた。

「あつ、皆お疲れさんや。」

すると、こちらに向かって歩いてくるティアナ除くFW陣ならびになのはにフェイト、ヴィータと三大将。

訓練を終え、一行はこれから食事である。

「はやてとリインは外回りか？」

「はいです、ヴィータちゃん」

「うん。ちょっとナカジマ三佐と話があつてな。」

「あつ。」

スバルは軽く反応する。

「スバル？お父さんやお姉ちゃんに何か伝言とかあるか？」

「…いえ。大丈夫です。」

ブオン！とエンジンが唸る。

見た目はフェイトが所有する車と比べていささか小さいが、デザインは武装隊で見かける小さな車だ。

「じゃあ、はやてちゃん、リィン。いってらっしゃい。」

「ナカジマ三佐とギンガによろしく伝えてね？」

「うん。」

「いってきま〜す」

↳機動六課・食堂↳

「スバルに聞きたい事がある。」

「あつ、はい。」

「お前さんのオヤジさんは”銀狼”と言われたゲンヤ・ナカジマ元中将なのか？」

「そうですけど。つて、ええ〜？！」

スバルは、ひたすら狼狽した。

「ナカジマ三佐ってそんな有名だったのですか？」

フェイトが赤犬に尋ねた。

「ああ。”銀狼”として海賊共から畏怖されていたからのう。」

「あの人はわっしらにとって本当に個性的な人だからねえ。」

「スバル。君は良い父親を持つちよる。誇りと思え。」

赤犬が優しい口調で言った。

「はい！」

「久しぶりに挨拶にでも行こうかのう。」

スバルの返事を聞いた赤犬はそんな事を洩らす。

〈陸士108部隊・隊舎〉

六課隊舎から出たはやて達がそこに着いたのはほんの数時間後だ。

そんなはやては隊舎の部隊長室にいた。

はやてはソファーに座り、向かい側に座るのはスバルの父親であり、はやての研修先の先輩また尊敬する人物でもある陸士108部隊隊長を務めるゲンヤ・ナカジマの姿がそこにあつた。

髪は銀で、老人とは見えなくらい若さを保っている。

「新部隊。中々、調子良いみたいじゃねえか。」

「そうですね。今のところは。」

「しかし、今日はどうした？古巣の様子をわざわざ見に来るほど暇な身でもねえだろうに……。」

はやては小さく笑い、

「愛弟子から師匠へのちよっとお願いです。」

言うと同時にビーー！というブザー音が鳴り響く。

「はいよ。」

とゲンヤが言うとドアがスライドし、青い髪のロングヘアに青いリボンをつけた少女がお茶を持っていた。

横には、リインが浮遊している。

「失礼します。」

彼女の名前はギンガ・ナカジマ。

この隊長であるゲンヤ・ナカジマの娘。

そして、六課のFW陣のフロントアタッカーであるスバル・ナカジマの姉にあたる少女である。

「ギンガ！」

「八神二佐！お久しぶりです。」

テーブルにはギンガが持ってきたお茶が置かれている。

すでにギンガの姿はなく、リインと共に部隊長オフィスを出た。

はやてはソファァーから立ち、モニターを展開させる。

ゲンヤは険しい表情を浮かべ、お茶を手に持つ。

「お願いしたいのは、この密輸物のルート捜査なんです。」

「お前んとこで扱っているロストログアか？」

「それを通る可能性が高いルートがいくつかあるんです。詳しくはリインがデータを持ってきてますので後でお渡しします。」

「まあ。うちの捜査部を使って貰って構わねえし、密輸捜査はうちの本業つちや本業だ。頼まれねえことはねえだが。」

「お願いします。」

「八神よ。他の機動部隊や本局捜査部じゃなく、わざわざうちに来るのは何か理由があるのか？」

「密輸ルート捜査は彼等に依頼しているんですが、地上のことはやっぱり地上部隊が一番良く知っていますから。」

「ふむ。ま、筋は通ってるな。」

ズズズとゲンヤはお茶を啜る。

一拍ついた。

「いいだろう。引き受けた。」

「ありがとうございます。」

「捜査主任はカルタスでギンガはその副官だ。2人共、知った顔だし、ギンガならお前も使いやすいだろ。」

はやては相槌をうつと、カツカツと音を鳴らしソファアに腰をかける。

「うちの方はテストロッサ・ハラウン執務官が捜査主任になりますから。ギンガもやりやすいんじゃないかと…。スバルに続いてギンガまでお借りする形になってしもつて、ちよつと心苦しくはあるんですが…。」

「なあに。スバルは自分で選んだ道なことだし、ギンガもハラウンのお嬢と一緒に仕事は嬉しいだろうよ。しかしまあ、お前も気がつきや俺の上官なんだよな。魔導士キャリア組の出世は早えな。」

「魔導士の階級なんてただの飾りですよ。中央や本局に行ったら、一般士官からも小娘扱いです。」

「だろうな。…おつと、すまん。俺も小娘扱いしてる。」

「ナカジマ三佐は、今も昔も私が尊敬する上官ですから。」「ふつ…そうかい。」

そんな事を話していると、通信モニターが開かれる。

「失礼します。ラット・カルタス二等陸尉です。」

モニターに映るのは、先に説明した通りの捜査主任のカルタスである。

「おお。八神二佐から外部協力任務の依頼だ。ギンガ連れて、会議室でちよつと打ち合わせしてくれや。」

「はっ！了解しました。」

「そういつこつた。」

「はい。ありがとうございます。」

「打ち合わせが済んだら、飯でも食いに行くか？」

《ミッドチルダ・繁華街》

ヴィータの案内でレイリーの仕事場に向かっていたのはとFW陣。

「確か、この当りにあるって聞いたが。あつ、ここだ。」

ヴィータは一軒の酒場に入った。

なのは達もその後についてきた。

「おっ！ヴィータの女将じゃねえですか？どないしましたか？」

一人の客がヴィータに声をかけた。

口調からして、その客は海賊だろう。

「レイリーは？」

「あそこです。」

客が示した先に、一人の老人が飲んでいた。

「久しぶりだな、副船長。」

「……っ！特攻隊長のヴィータか！久しぶりだな。なんだ、ティアナに会いに来たか？」

この老人こそ、かの”冥王”で恐れられた元ロジャー海賊団副船長のシルバース・レイリーである。

そして、ティアナの義父でもある。

「ああ。ティアナは？」

「こっちだ。」

レイリーの案内でヴィータ達が来たのは、剣道の道場だった。

その中央でティアナと一人の剣豪が対峙している。

「あの人って！」

「知ってるの、エリオ？」

なのはがエリオに尋ねた。

「あの人は、『王下七武海』の一角で世界最強の大剣豪”鷹の目”ミホークですよ！」

「「ええ〜〜！」」

「ん？誰かと思ったら、ヴィータの女将か。」

「ヴィータ副隊長。なのはさんにエリオ、キャロ。スバルも。」

「お前、ミホークから剣を教わっているのか？」

ヴィータが、ティアナに尋ねる。

「あつ、はい。ミホークさんにはいろいろとお世話になってしましますが。」

「なあに。ティアナは見込みがあつて強くしたんだ。迷惑とは思つておらん。」

「ありがとうございます、師匠。あの、父さん。」

「どうした、ティアナ？」

「しばらく、こっちに帰れないけど…。ちよくちよく連絡するね？父さん一人で私を育ててくれたから。」

「行きなさい。ティアナ、お前には果したい夢があるだろ？」

ティアナが果したい夢。

それは、兄の夢であつた執務官に自分になる事だつた。

兄が志半ばで死んでしまった。

そんな兄に代わり、執務官になる事がティアナにとって兄に対する恩返しだとティアナ自身は思う。

「はい。行つてきます。」

ティアナは1日の休暇で改めて、自分の夢を再確認した。

そして、そのために修業をこなした。

《ミッドチルダ・和食レストラン》

はやて達はそこで食事をしようと店に入った。

そこに、とんでもない客がいた。

「赤犬さん！」

六課の民間協力者の赤犬^{サカズキ}だ。

「八神二佐？」

「あつ！紹介するなあ。こちらは六課の民間協力者の一人、赤犬さんや。」

「久しぶりだな、”銀狼”。いや、ナカジマ元中将。」

「よせ。今はただの三佐だ。」

「八神。なぜ、ここに？」

「ナカジマ三佐と食事しに来たんや。」

「そうか。」

「ナカジマ三佐って赤犬さんと同僚だったのですか？」

「ああ。あの頃はな、ロジャーの野郎が海賊王になる前だな。あの頃の海は無法地帯だったな。」

「白髭”、”金獅子”、”冥王”、”紅き鉄鎚”などの名を知れる渡る大海賊が凌ぎを削ったからな。特に、”冥王”と”紅き鉄鎚”はあの時代の生き証人だからなあ。」

赤犬が名を上げた海賊は世間から”大海賊”と言われた海賊だった。

「”冥王”は知ってますが、”紅き鉄鎚”って……まさか……。」

ギンガは、思い当たりがあった。

「ああ。機動六課のヴィータ三尉だ。」

「ええ……！ヴィータが海賊やったんか！？」

「おお。彼女はロジャー海賊団特攻隊長だった。彼女は今、『四皇』の1人でもある。」

「そうか。ヴィータも辛かったんやなあ。」

そのとき、通信モニターが開かれる。

相手はフェイトだ。

「うん、了解や。すぐ戻るから、対策会議しよ。ちよつど捜査の手も借りれたところやから。…うん。そんなら、また後で。」

通信を切り、ふうと一息。

「何か進展ですか？」

「うん。事件の犯人の手掛かりがちよつとな…。」

はやては上着を持ち、

「という訳で。すみません、ナカジマ三佐。私はこれで失礼させていただきます。」

「おお。」

とゲンヤ。

はやてはテーブルの横にある勘定を取ろうと手を伸ばすが

「そんな…。」

ゲンヤがそれを先に取り、ヒラヒラと勘定を揺らして

「さつさと、行ってやんな。部下が待ってるだろつ？」

「…はい。ギンガはまた、私かフェイトちゃんから連絡するなあ？」

「はい、お待ちしております。」

渋々と言った感じでレストランを後にした。

「事件の犯人って、ジェイル・スカリエツィか？」

「恐らくな。奴はかの”世界政府”にいてDr・メカパングの側近だった男。もしかしたら、”アレ”が作られるかもな。」

「」

バシフィスタ
平和主義者！」

05：進展 part B（後書き）

まさかの事実。

ティアナがちょっと原作より強くしたかもねえ（・・・）

4 / 4（日）：本文の一部を加筆& amp;修正

06：ホテル・アグスタ part A（前書き）

ホテルオークションに警護に当たる機動六課。

しかし、そこで”異形”が現れた。

06：ホテル・アグスタ part A

↳ミッドチルダ・首都南東地区↳

日が進み、六課メンバー達と三大将はヴァイスが駆けるストームレイダーに乗り、空へ。

へり内では、メンバー達今後について、任務のおさらい会議を行っていた。

「改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。これまで謎やったガジェットドローンの制作者及びレリックの収集者は、現状ではこの男…。」

モニターを切り替えて、現れた男は肩までかかる紫の髪に、黄色の瞳を持つ男。

「広域指名手配犯にされてる次元犯罪者”ジェイル・スカリエツェイ”の線を中心に捜査を進めるで。」

「こつちの捜査は主に私が進めるんだけど、一応覚えておいてね。」
フェイトの説明にFW陣は相槌を打つ。

（スカリエツェイ、やっぱり生きていたのかねえ〜。）

（あの野郎が今回の騒ぎの首謀者か。）

（儂らを舐めちよるわ。）

三大将は元同僚として、スカリエッティを始末する事に決めた。

リンはFW陣の前を横切り、モニターの前に飛んでいくとモニターを再び切り替えた。

「で。今日、これから向かう先はここ。」ホテル・アグスタ”ですう。」

「骨董美術用オークションの来場警備と人員警護。それが、今日のお仕事ね。」

「取引許可の出ってくるロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い、との事で私達が警備に呼ばれたですう。」

「下らんのを。第一、ロストロギアちゆう物は厳重な管理をしとかないといけんに。何を考えちよる。」

赤犬が任務の内容に対して、不満を零した。

「レジアスもスカリエッティもわっしらが始末しないといけないからねえ。」

黄猿の言葉に隊長陣が睨んできた。

「レジアス中將はこのミッドチルダの守護者です。絶対にあなた方では逆らえません。」

なのはが睨みながら言った。

「どうかな？レジアスもゲンヤさんの元同僚だからな。あいつの海軍時代はあんまり名を上げなかった。レジアスはすぐに調子乗る。始末は上司である俺達の仕事だ。」

青雩がなのは達を睨みながら言った。

その睨みに、なのは達は言葉をなくした。

（どの組織にも闇がある、って事よね。）

ティアナは三大将の言い分に賛同した。

「えっと。この手のオークションだと密輸取引の隠れみになったりするし、色々、油断は禁物だよ？」

「……はい！」

とFW陣。

すると、先ほどから気になっていたキャラコが拳手し

「あの…、シャルル先生。さっきから気になってたんですけど…、その箱って…。」

「ん？」とシャルル。

目でそれを見て、クスツと微笑を漏らし、シャルルは口を開けた。

「隊長達のお仕事着」

（エリオ side）

僕は今、キャロと地下倉庫を警護している。

僕は、赤犬さん達にしか話していない秘密がある。

それは、僕が海賊だという事。

更に、自然系ゴロゴロの実の雷人間でもありません。

”四皇”の一人、【雷皇海賊団】の船長で”雷皇”と恐れられました。

フェイトさんでも、話していない事実なのです。

だから、今日でスバルさんやなのはさん達に見せようと思っている。

そんな状況があればね。

「キャロ。そっちは、何かあった？」

「何もないよ？エリオ君、大丈夫だよ、ガジェットが出てきたらやつつけちゃお」キャロは優しいなあ。

こんな僕を慕っているなんて。

ありがとう、キャロ。

こんな僕だけど…。

君を守るよ。

”雷皇” エリオとして…。

*

スバルとティアナもまた、ホテル周辺を警護していた。

『でも、今日は八神部隊長も守護騎士団も全員集合か…。』

『そうね…。あんたは詳しいわよね。八神部隊長や副隊長達のこと。』

『うん…。父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど…。』

スバルによる長い説明が終わり、

『レアスキル持ちの人は皆そうよね。』

『ティア、どうしたの?』

『別に。』

『そ。じゃあ、また後でね!』

『うん…。』

この言葉を最後に二人の間で念話が途切れる。

ティアナは思う。

(六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ。八神部隊長はどんな裏技を使ったかのか知らないけど、隊長格全員がオーバース。副隊長でもニアSランク。他の隊員達だって、前線から管制官まで、未来のエリート達ばかり。あの歳でBランクを取っているエリオと”悪魔の実”の能力を使うキャロ。潜在能力と可能性の塊で優しい家族のバックアップもあるスバル。そして、父さんが強いと認め”三大将”である青雩さん、赤犬さんに黄猿さん。こうして考え

てみると、うちの部隊で凡人は私だけだな…。っ！)

ティアナは閉じた瞼を開き、”何か”を感じ取った。

「まさか…。くっ、ここに来るのか。」パシフィスタ”平和主義者”！！仲間に手出しはさせないわよ！」

ティアナは異形を倒すべく、ホテルの裏側に向かった。

↓ホテル・アグスタの屋上↓

「クラールヴィントのセンサーに反応。シャーリー！」

『はい。…来た来た、来ました！』

『ガジェットドローン陸戦？型、機影三十、三十五。』

『陸戦？型、二、三、四…！それに、UNKNOWNの反応も！』

「前線各員、状況は広域防御戦です。ロングアーチ01の総合回線と合わせて、私シャマルが現場指揮を行います。」

前線メンバーは出された指示に相槌を打つ。

07：ホテル・アグスタ part B

シャマルは戦闘態勢のために騎士甲冑を纏う。

ヴィータ、そしてシグナムもまた騎士甲冑を纏い、ガジェットドローンの遊撃に向かう。

*

ティアナはホテルの裏側に駆けつけた。

すると、パシフィスタが空から降ってくる。

「来たわね、パシフィスタ！」

パシフィスタ（PX-1）がティアナの姿を捉えた。

口からレーザーが放たれた。

「くっ！」

辛うじて、ティアナは回避したがホテルから爆発が起きた。

「しまった！くっ、これ以上はやらせないわよ！『彗星』！」

一瞬の動きで、懐に入った。

「第十一手、『冥天』！」

渾身の居合を繰り出す。

しかし、ダメージがなかった。

PX-1は手からレーザーを放とうとしたが、バインドで止められた。

振りかえってみると、デバイスを構えたなのはの姿があった。

「すごいねえ、ティアナ。」

「なのはさん……。っ！気をつけてください！バインドぐらいでは勝てません。」

PX-1はバインドを力づくで破った。

「どつするの、ティアナ。」

「一気に攻めるしかありません。私になんとか惹き付けます。その間でなのはさんが仕留めてください。」

「分かった。」

ティアナは一気に懐に入った。

「第七手、『木犀』！」

飛び上がり、顎に斬撃を当てた。

「第十二手、『雷霆』！」

空中からパシフィスタの肩に刺突を当てた。

PX-1は一瞬だが、怯んだ。

「行くよ、ティアナ」螢火。」

なのはの手から火の玉が放たれた。

「なのはさん?! どうして、キャロの能力を!?!」

「キャロはコピーなの。私は悪魔の実、”メラメラの実”の純粹な能力者なの。火達磨!」

火の玉が爆発した。

PX-1は燃え尽き、倒れた。

「行こう、ティアナ。他にもいるから。」

「はい。」

くアグスタの屋上へ

「……………」

フェイトは言葉をなくした。

なぜなら、エリオがストライダーから雷を出して応戦しているから。

「ハアア〜！」

ストラータを突いてガジェットを破壊していく。

ガジェットからレーザーが放たれた。

「無駄だ。もう昔の僕じゃないんだ！」

自然系ゴロゴロの実の能力で体が雷だからダメージがない。

よって、”雷皇”の底力の範疇である。

「エリオ…。」

フェイトはそんなエリオの姿を見て、泣きそうになった。

「フェイトさん…。今までごめんなさい。」

「いいのよ…。エリオ、私が援護するね？」

「アグスタ周辺」

ヴィータとシグナムもまた、パシフィスタの襲撃を受けた。

シグナムはレーザーを受けて負傷した。

「くっ！手強い…。」

そこ、ヴィータが

「無理するな、シグナム。あたしに任せとけ。」

と言って、シグナムを下がらせた。

パシフィスタは口からレーザーを放とうとした。

ヴィータは左拳を構えた。

「ぶち壊れる!!!」

大気を殴って、ヒビを入れた。

すべてを破壊する”グラグラの実”による地震の力でパシフィスタはみるみると大破していく。

*

モニター越しで見ていた副隊長達とティアナの实力を見たスバルは驚きの声を零す。

それだけじゃない。

なのはとエリオの新たな姿にも驚きを隠せなかった。

スバルは改めて感じた副隊長達とティアナの实力。

更に、エリオとなのはが”悪魔の実”の能力者であった。

自分との格の差を見せつけられた。

これが副隊長の実力。

そして、これでリミッター付き。

歯ぎしりするスバルはグツと拳を作る。

新人たる自分とリミッター付きの副隊長達は同等に思えない。

こんなにも差が違った。

ふっと、スバルは背後に悪寒を感じた。

スバルが振りかえってみると、パシフィスタがいた。

「っ！いつの間にかここへ!？」

スバルは慌てて、距離をとる。

パシフィスタは手からレーザーを放つ。

スバルはそれを回避したが周辺で爆発が起こる。

「くっ！」

スバルは焦っていた。

【改ページ】

【自分はある程度の才能や実力がある。

だが、ティアナやエリオ、なのは達にはそれ以上の実力を持っている。

(こんなにも差が違うのだろう)という劣等感を抱いた。

”なんで、私にはティアやエリオみたいな特別な能力がないの?”

その一言でスバルを間違った方向へと突き動かした。

「行くよ、相棒!!フルドライブ!!」

スバルの体が青い光に包まれる。

「ギア、エクセリオン!!」

スバルは単身突撃を行った。

「スバルさん!!」

キャラはすぐに理解した。

UNKNOWNに対して、単身突撃は”死”を意味している。

「ロード：カゲカゲ、影法師【ドッペルマン】」

自分の影を実体化させた。

「スバルさん、ごめんなさい！角刀影【つのとかげ】！！」

頭の尖った巨大なトカゲの形にしてスバルを串刺しにした。

「キャ…キャロ？なん…でな…なの？」

スバルはその場で気絶した。

『ヴィータ副隊長もしくはなのはさん。至急、来てください。』

キャロはヴィータとなのはに状況を報告した。

「おお。キャロ、大丈夫だったか？」

ヴィータが駆けつけた。

「はい。私は大丈夫ですが…。」

「ああ…。分かってる。」

ヴィータが目線を移した先には横たわっているスバルがいた。

「とりあえず、スバルはあたしに任せろ。お前はエリオと合流しろ
！」

「了解しました、ヴィータ副隊長。さすがは”紅き鉄槌”ですね」

「…そうかい。」

*

「えっと。報告は以上かな？現場検証は調査班がやってくれるけどみんなも協力してあげてね？しばらく待機して、何も無いようなら撤退だから。」

何時ものように4人が返事する。

だが、スバルだけは小声で言い顔を俯かせていた。

「それと、スバル…。」

「はい…。」

「ちょっと、私とお散歩しよっか？」

「…はい。」

*

くスバルsideく

林道をなのはさんと2人で歩く。

怒られる…だよな。

あんな無茶をしちゃったんだよ。

「無茶、しちゃったみたいだね。」

「すみません。無理にフルドライブを使ってしまい…。」

「私は現場にいなかったし、ヴィータ副隊長に怒られまみただから、改めて叱ったりしないけど。」

「…はい。」

「でもね。スバルは一人で戦っている訳じゃないんだよ？スバルのポジションは皆を護る盾だから、ね？」

「…っ。」

「その意味と今回の失敗の理由をちゃんと考えて、同じ事を二度と繰り返さないって約束できる？」

「…はい。」

私はしっかりと頷いた。

言われなくても、二度とあんな無茶はしない。

私はもっと強くなって、ティアの支えにならなくちゃいけないんだから。

「なら、私からはそれだけ。約束したからね？」

「はい。」

なのはさんの言いたい事は多分わかっている。

ただ、それでも私は強くなりたい。

ティアやエリオにキャロの為に。

私自身の為にも。

（side・out）

「おやおや。管理局のデータベースである”無限書庫”の若き司書長、ユーノ・スクライア先生じゃありませんかねえ。」

「海軍大将、黄猿さん!？」

「知り合いなの!？」

「お会い出来て光栄ですなあ。もしかして、また研究をなさっているのですかあ？」空白の100年”を!」

「オハラ”みたいなにはなりたくありません。ですから、研究を手放しました。」

「それは安心しました。もし、またなさっていたら”オハラ”みたいに無限書庫がなくなってしまうからねえ。」

「……。」

「いい加減にしてください!!」

「あんたは黙っててくれないかねえ?」

黄猿のレーザーがフェイトの横を通り抜ける。

「くっ!」

「わっしはこれで失礼するよ。」

*

《六課隊舎前》

撤退準備が完了し、戻れたのはもう日が大分傾いてからだった。

「皆、お疲れ様。それじゃ、今日の午後の訓練はお休みね。」

「明日に備えて、ご飯食べて、お風呂でも入って、ゆっくりしてね?」

「はい!」

その場で解散。

全員で宿舎へと向かう。

「皆…。私、これからちょっと一人で練習してくるから。」

スバルが言いだした。

「自主練習ですか？僕も付き合いますよ！」

「私も！」

「エリオ、キャロ。気持ちは嬉しいよ？でも、一人でいたいんだ。

「ごめんね？」

「珍しいわね。あんたが自主練習だなんて。あんまり無理するんじゃないのよ？」

ティアナの気遣いに

「大丈夫だって。」

と言い返し、一人で練習場に向かった。

『スバルさん…。とても辛そう。』

『仕方ないよ。自分の力があのUNKNOWNには無意味だったから。ティアさんはあのUNKNOWNについて、何か知っていますか？』

『あれはパシフィスタっていうの。』

『パシフィスタ?』

『平和主義者、ですか?』

『そう。まあ、勝てないのは無理ないでしょうね。』

『ですよ…。』

エリオはそう言って、モニターを開いた。

「こちら、エリオ・モンディアルです。雷皇海賊団1番隊のマルコさんはいますか?」

エリオの通信の相手はあの”不死鳥”マルコだった。

エリオとマルコの接点は一緒に、何か!?

07:ホテル・アグスタ part B (後書き)

いよいよ、次回はあの”イベント”です(・・・)

誰かアイデアをください！

お願いしますorz

アンケートを募集中です。

なのはとスターズの模擬戦での展開の内容を募集しております。

*

?三大将による妨害でカオス化。

?エリオとキャラの妨害で更に、カオス化。

?スバルとティアナの喧嘩でもっと更に、カオス化。

の3つを候補とします。

どれか選んでくれれば嬉しいです。

期限は明日の午後4時までとします。

よろしくお願いしますm(____)m

それ以外があれば、それも候補にしたいので気軽に言ってください

(^ ^)

できるだけ多く回答が欲しいです m () m

ご協力をよろしくお願いします m () m

08：たいせつなこと part A（前書き）

スバルは自分のミスを悔やんだ。

相棒のティアナはそんなスバルを心配した。

そして、模擬戦で”あの男”の姿があった。

08：たいせつなこと part A

「あのさ、2人共ちよつと良いか？」

ヴィータは隊舎の廊下を歩いてきたのはとフェイトを呼び止める。

*

ヴィータが入った部屋にはシグナム、シャーリー、三大将がいた。

それぞれが近くにある席に着き、ヴィータが切り出した。

「訓練中から時々、気になってんだよ…。スバルの事…。」

話題はスバルの事であった。

「強くなりたいたいなんてのは、若い魔導士なら皆そうだし、無茶も多少するもんだけど…時々ちよつと度が超えてる。なんでだよ!？」

「多分、私のせいです。」

ティアナが部屋に入ってきた。

更に、エリオも入ってきた。

「ティアナにエリオ。で、”私のせい”って？」

「スバルは剣術を使う私を見て…恐らくですが劣等感を抱いたと思います。そして、なのはさんとエリオにヴィータ副隊長、赤犬さん

達みたいな”悪魔の実の能力”も持っていない自分に悔しいだと思
います。」

「なるほどねえ〜。それなら、辻褃が合うねえ〜。」

「だが、相手はパシフィスタ。相手が悪かったな。奴らは半端じゃ
ねえ強さを持つちよるからのう。恐ろしい人型兵器じゃ。どう足掻
いても勝てん相手じゃという事を忘れちよる。」

「でも、ティアナとエリオ、キャロは互角に渡りあっていましたよ
?」

シャーリーが疑問を投げかける。

「簡単に答えると、”人を超越した存在”ちゆう事だ。」

「”人を超越した存在”?どういふ事ですか、赤犬殿。」

「ランスターのお嬢さんはな、かの”冥王”レイリーの義娘なんじ
や。後見人は”鷹の目”ミホーク。さらに、お嬢さんは”茜髪”あかねがみと
呼ばれちよる。そして、エリオの坊主だが…。」

赤犬はふっと、エリオを見つめる。

「……………。(もう、覚悟は出来ています。)」

エリオはコクンと頷いた。

「(…そうか。)エリオの坊主はヴィータの女将と同じ4人の大海
賊、通称”四皇”の一人じゃ。」

「四皇”つて次元世界の均衡を保つ三大勢力の一つではないか！
？他には”時空管理局”、”王下七武海”とある。まさか、”四皇”
の2人がここにいるとはな。」

「あたしはそんな強くねえしよ。」

ヴィータは大海賊としての自分を否定した。

「いや、ロジャー海賊団にいたお前は”世界最強の女海賊”として
かの”白髭”と同等の力を持つてるぞ？」

「”白髭”か。懐かしい名だ。あいつは死んじまったんだよ。あいつ
の後釜がエリオなんだ。」

「「「「えっ!?!」「」「」

「あいつの船のクルーもエリオを可愛がったらしいからな。」

「”白髭”……エドワード・ニューゲートさんは僕に海賊の全てを
教えてもらいました。僕は海賊になる事がニューゲートさんに対する
恩返しだと思います!」

『”白髭”よ。空から見てるか？エリオは間違いなく、お前の後継
者だな。だから、安らかに眠れ。あたしがエリオに教えてやるから
な。』

ヴィータは亡き戦友にそう言った。

*

《訓練場》

そこにはFW陣、三大将、なのは、ヴィータがいた。

フェイトは急に仕事が入り、そちらに向かった。

「さて、じゃあ午前中のまとめ。2011で模擬戦やるよ?」

なのはは、スバルとティアナを見て

「まずはスターズからやろうか? バリアジャケット準備して。」

そう言った。

「はい!」

「エリオとキャロは、あたしと見学だ。」

「はい!」

「わっしらも見学ですかねえ、女将?」

「ああ…すまねえ。ついでに。」

ヴィータは黄猿に耳打ちで

「なのは達に何か起きたら、止めてくれないか? 青雉と赤犬も頼ん

だぞ。」

と言った。

「了解！」「」

こうして、スターズの模擬戦が始まった。

そして、三大将と機動六課との格の差を見せつけられる事になる。

*

それから少しして、フェイトがやって来た。

「あれ？もう始まっている。」

「フェイトさん！」

エリオが気付いて声をかける。

「私も手伝おうと思ってたんだけど…。」

「今はスターズの番。」

フェイトに対してヴィータがそう答えた。

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね。」

「ああ…。なのはもここんとこ訓練密度が濃いからな。…少し休ませねえと。」

フェイトとヴィータはなのはの方を見つめながら言う。

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニューを作ったり、ビデオで皆の陣形をチェックしたり…。」

「なのはさん…。訓練中も、いつも僕達の事見ててくれるんですね…。」

「ほんとに…。ずっと…。」

エリオとキャロもなのはを見上げて言う。

「気味が悪いねえ。」

「なに、バカな事をしちよるものか。」

「休みを知らない愚か者だな。」

三大将からの指摘にフェイトはキレてデバイス【バルディッシュ】を構えた。

「あなた方は、そんな管理局に対して不満を言いたいんですか？それに、なのはの教導を否定したいのですか？」

「不満だらけだ。まだ、ヴィータの女将の方が良い。の女将はな、世界中の海を知り尽くしてる。”海賊王”ロジャーの次に世の海賊

共はず女将の助言を聞くという。」

「あたしの助言を聞いた奴らはまだ”超新星【ルーキー】”なんだ。だから、心配なんだ。おっ、クロスシフトだな。」

ヴィータの一言で皆、ティアナ達の方を見つめた。

「クロスファイア、シュート！」

数十個の誘導弾を撃った。

「おっ、なかなか良いキレじゃねえか。」

「うん、コントロールも良いみたいね。」

なのはは、それを難なく回避した。

「あっ…。」

そこに来るのかが分かっていたのかようになのはの前方にはウイングロードが展開されていた。

重厚な車輪の音と共にスバルが迫る。

それに、すぐさま対応して迎撃を試みていたが表情が一変する。

「フェイクじゃない…本物!？」

展開した魔力弾を撃ち込む。

光の尾を引いてスバルへと強襲をかける。

「おおおおお〜！」

シールドを展開し、突破しようとするスバル。

「うりゃああ〜！」

スバルは大振りに振り抜くとなのはのデバイス「レイジング・ハート」にシールドを張られ、阻まれてしまう。

09：たいせつなこと part B

「くっ…。」

突破することの出来ない強大な壁を前に表情は強張る。

「……………」

なのはがスバルの体制を崩すと、スバルはウイングロードから弾き飛ばされる。

「こら、スバル。ダメだよ、そんな危ない軌道！」

「うわぁ…っ。…すみません。でも、ちゃんと防ぎますから！」

*

「ん？ストライダーにプライベート通信だ。はい、エリオ・モンディアルですが。」

『坊っちゃんか。俺、”黒髭”ティーチさ。』

「なにっ！？ティーチだと!？」

『ヴェータの女将か！久しぶりですな、ゼハハハ！』
- - - - -

「スバル、どうしちゃったのか？」

「なのはさんの教え方では、いつまで経っても強くなれません！」

「少し…頭を冷やそっか。」

「頭を冷やすのは、貴様のほうだ。自分のやり方が”正義”とか”悪”とか、んな物に例えるのは、この世のどこを探しても…。」

なのはは、振り返ろうとしたが。

「答えは、ねえんだろ！！下らねえ！」

なのはは、何者かに踏み潰された。

「良いか、オメエら！人の夢は終わらねえんだ！！ぜ八八八！！」

男の笑い声で、フェイトは確信した。

「会いたかったぜ。”大魔女”プレシア・テストロッサのご息女、フェイト・T・ハラオウン執務官殿。」

「”黒ひげ”マーシャル・D・ティーチ！！」

「よく聞け！！フェイト・T・ハラオウンは、かの”海賊王”G・ロジャールの実の娘なんだ！！」

ティーチの発言で六課隊舎が静まりかえった。

「嘘…でしょ？」

フェイトは、耳を疑った。

「この世界にもいたか。」危険因子」が。」

「なるほどな。」大魔女」と海賊王」の娘か。お嬢さんもレジアス、スカリエツティと同様に俺たちが始末しなくてはならねえのか。」

「邪魔するな、三大将。こいつの首はミッドチルダ政府が欲しがってる。その首を持っていれば、俺たち海賊は管理局と渡り合える。さて、かかって来い！」閃光の死神」フェイト・T・ハラオウン！」

ティーチは、フェイトを挑発した。

「公務執行妨害で貴方は逮捕します！」

フェイトは、怒りで周りが見えなくなっていた。

「やってみるよ！俺は王下七武海だぞ！そんな事したら、管理局と政府とで戦争が起きるぞ？」

「それでも、プレシア母さんを馬鹿にした貴方を許さない！！！」

【ソニックムーヴ】

音速でティーチの懐に入ったフェイトはバルディッシュを振り抜く。

だが、ティーチにはダメージがなかった。

「ゼハハハ！無駄だ、俺は」史上最凶の悪魔の実」自然系ヤミヤミの実の闇人間だ！しかも、完全な闇の力を入れた。」

「くっ！自然系って厄介だ。」

「闇の引力からは逃れる事は出来ねえ。闇水くつみず」

闇の引力はフェイトを捉えた。

「っ…！これは！？」

「そうさ。俺の闇に触れた人間は悪魔の実の能力者だろうが、魔導師だろうがあらゆる能力を無効にする。」

「くっ！」

「無駄だ。どのみち、貴様には俺を倒す事は出来ねえ！」

フェイトの腹にティーチのパンチが入った。

「がはっ！」

廃ビルの壁に吹き飛ばされた。

「さて、次は…。」

ティーチは、淡黄色に輝く火の玉を眺めた。

「萤火、火達磨！！」

「どわあ〜！！」

ティーチの体を火達磨になっていく。

「フェイトちゃんは、私が守るなの！」

なのはの決意は固かった。

「……。調子に乗るとはいけねえな、”管理局の魔王”さんよ。」

しかし、ティーチは炎を闇で飲み込んだ。

「なっ！どついう事なの？！」

「俺は受け流す事も可能だが、引きずり込む事も可能だ！そこで、見物しとくと良い。闇穴道！！」

ティーチは訓練場を飲み込もうとしている。

.....

「皆さん！ここから早く離れて下さい。飲み込まれますよ！」

エリオの言葉でヴィータ達は、避難した。

.....

「これは？！」

なのはは、訓練場が地面に飲み込まれる光景を目の当たりにした。

「闇の無限の引力で、あらゆる物を押し潰す！！！」

徐々に、訓練場が飲み込まれていく。

そして、訓練場が何もかもがなくなった。

「そして、これが訓練場のなれ果ての姿だ！解放！！」

訓練場にあつた建物が、無惨な姿と化した。

「さあ、やってみるよ！」

「要するに、引力に捕まらなかったら良いでしょ？」

なのはは、推測を立てた。

「…最近の若えもんは、世間知らずだな。闇水！！」

掌から闇の引力を発生させた。

正確に、なのはの”実体”を捉えた。

「くっ！」

なのはは、ティーチの元に引き寄せられた。

「どうした、捕まらないだったな。言つとくが、闇の引力は一切の光さえ逃さねえ。ん？なんだ、もう気付いたのか。」

「まさか！？」

「そうさ。俺の闇に触れたら最後、悪魔の能力が使えねえ。それだけじゃねえ！魔法や希少技能レアスキルもだ。」

ティーチは、なのはの腹に渾身のパンチを決めた。

「ぐふっ!?!」

なのはの口から血が吐き出した。

「どうした。もう息が上がったか?無理もねえ、9才で魔法使いになつてから無茶して身体中がボロボロになつちまったからな。」

「っ!」

なのはの過去がバラされた。

「しかも…例の事故のおかげで、お前さんは再起不能にまで陥つた。だがな、それを仕組んだのは

管理局なんだ!」

「えっ!?!」

なのはは、言葉をなくした。

「なんせ、お前さんも”Dの一族”だからな。そうだろう？高町なのは、いや…ナノハ・D・タカマチ。お前さんの親父は”東の海最強”と言われた革命家シロウ・D・タカマチなのだ！」

「ちっ！この国には危険因子が多すぎちよる。どうなってちよるんだ！」

「これが、時空管理局の甘さだね。」

黄猿は、眉をひそめながら言った。

「何者なんや！？あいつは！」

いつの間にか、駆け付けたはやてが尋ねた。

「雷皇海賊団2番隊隊長、王下七武海の一人の”黒ひげ”マーシャル・D・ティーチさ。」

青雉が答えた。

「なのはちゃんが劣勢！？有り得へんやろ?!」

「あいつの能力に飲み込まれると、あらゆる能力が無効になるとい
う。」

.....

「もうお終いか、高町なのは！」

「私は！自分の身体がボロボロになってたって関係ないなの！後悔しないように全力全開で頑張っているの！」

フラフラになりながら立ち上がったなのは、ティーチに吐き捨てるように言った。

「そうか…。なら、高町なのは！闇に死ね！！」

「大炎戒！」

地面に炎を展開し、太陽を思わせる巨大な火の球を作り出した。

「炎帝！」

「ゼハハハ！太陽対闇か！勝者は、一人だ！」

「フェイトちゃんは、私が絶対を守るからね！」

この後、高町なのは「一等空尉は”黒ひげ”との戦闘に敗北。

フェイト・T・ハラウオン執務官も戦闘に敗北。

両者は、全治1ヶ月の重傷との診断結果が出た。

「坊っちゃん。政府の連中がパシフィスタを動かしたとき。」

「えっ！？本当ですか、ティーチさん！直ぐに、隊長達をクラナガ

ンに集結させてください！」

「ついに、動くのか？坊っちゃん。」

「このまま、引きこもっていたら”雷皇”の名が腐りますからね。」

「ゼハハハ！全くもってその通りだな、坊っちゃん。」

こうして、なのはとフェイトが不在のまま、パシフィスタ討伐に向かった。

く続くく

10：たいせつなこと part C

《ミッドチルダ・クラナガン》

赤犬は一人、考えていた。

自分の”正義”は一体、なんなのか？

これまで通り、海賊という”悪”を許さない考え方を改めない。

だが、ミッドチルダに来てその考え方が多少丸くなった自分がいた。

(やれやれ。儂は何を考えちよる。海賊は儂にとって一番の”悪”だ！じゃが、エリオの坊主は儂らに殺されるリスクを背負って儂らに話してくれちよる。ヴィータの女将は海軍本部でも尊敬されちよるお方じゃ。やっぱ、儂の正義は丸くなったものじゃな。)

「そこの者、止まらんか！」

赤犬を呼び止めたのは首都防衛隊だった。

「貴様だな。次元漂流者は。」

「だったら、なんじゃ？」

「一緒に来てもらおうか。あの人型兵器について訊ねたい。」

「お前さんらに話すつもりはない。」

「くっ！貴様、我々管理局を甘く見ているな！こうなったら、強行手段だ！やれ、お前たち。」

「……貴様ら管理局という”悪”を許さない！！大噴火！！」

赤犬に防衛隊の魔導士は焼き殺された。

「これでいいのじゃ。海賊を”悪”と見る儂が間違っていた。」

赤犬は自分自身に結論をつけた。

”悪”とする対象を海賊 管理局に変えた。

「儂らで管理局を変えていかないといかんのう。さて、皆のどこに行くか。」

踵を反して、赤犬は歩き始めた。

*

「エリオは”四皇”なのに、船から降りても良かったの？」

「いえ、ちょっと……いろいろとあるので。でも、クルーの皆さんは許してくれましたから。（三大将の皆さんと一緒に管理局を変えるなんて話せません。まあ、キャラも手を貸してくれるみたいだし。）」

「

「そうなんだ。」

*

ティアナは一人、昔からの相棒である黒刀【月黄泉】を手にしながら考えていた。

（スカリエツティは世界政府という強大な組織にいた。パシフィスタはもはや、管理局だけではなくミッドチルダ政府にも悪影響を及ぼすかもね。）

「でも、やらないといけないんだよ。」

ティアナは覚悟を決めて、遊撃に向かった。

*

「八尺瓊の曲玉」

黄猿は光の弾で応戦していた。

パシフィスタも手からレーザーを出し、反撃する。

「厄介だねえ〜。天叢雲剣。」

巨大な光の剣で切り裂いていく。

*

スバルは、“悪魔の実”の能力を手に入れた。

「ゴムゴムの〜。」

腕を後方に思いっきり伸ばした。

「銃！」
ヒストル

パシフィスタに当たったがそんなダメージがなかった。

「第一手、『陽嵐』」

突然の爆風でスバルは目を瞑った。

「やっぱり、スバル一人じゃ無理があつたみたいね。」

「ティア！」

ティアナが援護に駆け付けた。

「スバル！大丈夫だった？」

そこに、一人の少女がやって来た。

「ギンガさん。」

「ギン姉！」

スバルの姉のギンガ・ナカジマだった。

「スバル、ティアナ。あいつは何なの？」

「『パシフィスタ！』」

「平和主義者？」

「ミッドチルダ政府が極秘で開発した人間兵器です。」

「政府が！？こんな事じゃ管理局との仲が険悪になるばかりよ！」

「……………」*

『こちら、雷皇。マルコさん、応答してください。』

『坊っちゃんかい。どうして連絡を？』

『暫く、船を預けてもらいますみませんでした。これより、行動を再開します！船の浮上の準備を。』

『了解よい。』

通信回線を閉じた。

「いよいよ、覚悟を決める時ですか。」

エリオは、空を見上げながら言った。

*

ヴィータとシグナムは上空から様子を見守っていた。

「どついう事だ、ヴィータ！この騒動はミッドチルダ政府が仕込んだというのか！？」

シグナムはパシフィスタがミッドチルダ政府によって開発した人間

兵器だという事に驚きを隠せなかった。

「まあ、そういう事だ。これであたしらは政府と管理局の板挟み状態だ。このままだと六課が絶好な餌になってしまっただろな。」

「くっ…。テスタロッサの家系の事も多分、管理局も政府も気付いているだろう。」

「とにかく、今はパシフィスタを叩く事が先決だ。」

「…そうだな。」

ヴィータとシグナムは上空から地上に降下し始めた。

*

（フェイトちゃん、辛かったやろな。私になのはちゃん、六課の皆でフェイトちゃんを支えるんや！）

はやては一人、胸の内で決意を固めた。

「なんとか、全機破壊だね。大丈夫、スバル？」

「かなり、辛い…。」

「しっかりしなさい！」

ティアナの櫓が入るのもスバルはすでにへろへろだった。

「お前たちの力はその程度か。」

突然の問いかけにスバル達は武器を構えた。

だが、ティアナだけが気付いた。

「もしかして、バーソロミュー・くま…ですか？」

「久しぶりだな、”茜髪”。…そうだ、ミッド政府からお前に、七武海入りの要請が来ているぞ。」

「まだまだ、師匠を追い越せていないので。それに、自分の夢も叶っていませんので。今暫く、時間を下さい。」

「分かった。」

「バーソロミュー・くま…!!」

「ギン姉、知ってるの？」

「バカ！王下七武海の一人だよ！」

「ええ〜!？」

「いかにも、七武海の一人だ。ヴィータ船長には大恩がある。」

「ええ〜!？あなたはヴィータ副隊長の仲間なんですか!？」

「的を得ている。ヴィータ船長はどこだ。」

「よっ！くま。」

「ヴィータ副隊長！」

「悪いがこの場は2人してくれないか？」

ヴィータからの切実な頼みだった。

「分かりました！なのはさんには後で来るって伝えて来ます。」

「すまねえ。」

ヴィータはスバル達を見送った。

「……”黒髭”の言ってた事は間違ってたねえか？」

ヴィータはくまを見上げて尋ねた。

「間違いない。フェイト・T・ハラウオンは、”海賊王”ロジャーの娘だ。」

「……。そうか、ご苦労だった。」

「アイゼン海賊団に集合はかけないのか、船長？」

「心配するな。エリオがいるからな。」

「エリオ…」 雷皇” エリオ・モンディアルか？」

「白髭”の野郎が遺した財産だ。エリオを導くのがあたしの役目だ。」

「……。」

「だが、【備えあれば憂いなし】って言うしな。とりあえず、ドフラミンゴにジンベエには伝えておけ。」

「ミホーク、クロコダイルは？」

「ミホークは弟子の成長を確かめさせる。クロコダイルはミッド政府の裏情報の入手。そう言っておいてくれ。」

「了解した、船長。」

くまは踵を反して、去っていた。

*

《機動六課・訓練場》

時間が過ぎて、すっかり空には2つの月が輝いていた。

スバルは一人で自主トレを行っていた。

(このままじゃ、護りたいものが護れない！)

「こら、スバル！自主トレは禁止って言ってなかったの？」

スバルが、振り返るとなのはが立っていた。

「なのはさん！私は大丈夫です！ほつといて下さい。」

「ねえ〜。私つてさ、一度”墜ちた”事があるの。」

「えっ!?!」

なのはの告白にスバルの動きが止まった。

「皆はまだ、”原石”の状態なんだよ。ティアナは、我流剣術、射撃に幻術。エリオは、ゴロゴロの実による広範囲攻撃と体を雷に変えて攻撃を受け流す絶対的な回避力。キャラは後方支援に”悪魔の実”の能力を活かしたオールラウンドアタッカー。そして、スバルはクロスレンジの爆発力にゴムゴムの実による近接格闘。」

なのはがFW陣の長所を言っていく。

「まあ、ティアナとエリオは十分に強いしね。キャラは赤犬さん達から見ればまだ未熟という事だったみたいだし、これから強くなれるよ!」

「あの…私はまだ何かを”護る”事が出来ますか?」

「うん 一緒に頑張ろうね」

なのはの言葉を聞いたスバルはなのはに抱きついて声を殺して泣い

た。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…。」

「ううん。私の教導が地味だから、スバルは”取り残されたんだ”
って感じたんだね。私こそごめんね？」

「うわあぁ〜ん!〜!」

我慢出来ないのか、大声で泣いた。

こうして、スバルのとんだ勘違いによるスターズのすれ違い騒動は
幕を閉じた。

だが、その代償のフェイトの命が狙われている。

なのは達は『フェイトを護る!』と誓った。

しかし、

『八神部隊長、大変です!エリオ君が行方不明に!』

この報告を受けた六課メンバーの顔が、蒼白くなっていく。

何故、エリオが姿を消したのか!?

その真相は、誰も知らなかった。

10:たいせつなこと part C (後書き)

やっと、終わった？

長かったぜえ〜” or z

次回からは原作とは一味違う展開になるかもしれません！

今後ともよろしくお願いしますm () m

11: "赤髪"との邂逅(前書き)

フェイトの家系が明らかとなってしまった！

すると、あの男が機動六課にやって来た。

《訓練場》

「ん？ シャンクスがあたしに話したい事があるって？」

ヴィータがそう問いかけたのは

「へい。 お頭から急ぎの用事とかで女将に確実に伝えろって俺が。」

縄で縛られている海賊、赤髪海賊団のクルー。

名をロックスターという。

「…そうかい。 なら、シャンクスにこう伝える。” 言いたい事があるなら、自分で言いに来い！” っと。」

*

《海上》

「又ツハハハ！ 変わらねえくな、あの御方も。」

『笑い事じゃねえよ！ お頭！』

「こつなるとまあ、思っていたがな。」

『もう少し時間をくれ、お頭。 俺はこんな屈辱を受けたの初めてだ』

「おいおい。何をするつもりだ？止めておけ！」

『だ、だけど！このままじゃ、俺のメンツって物が！』

「メンツより、お前の命が大事だ。お前だけじゃ、もうどうしようもないんだ！ご苦労さん。お前はまっすぐ帰って来い。」

『……………』

電電虫から返事は返って来なかった。

「で、どうするんだ。お頭！」

「行くよ、船の準備を！」

「”紅き鉄槌”の所にか？」

「ああ。」

「そんな事をして、政府や管理局が黙っておれんぞ。」

「な〜に。」

シャンクスが立ち上がると、一斉に視線がシャンクスに集まる。

「邪魔するなら、こっちも黙っちゃおれんぞ！」

「「「ウオオオ〜！！！！！！」」」

「野郎共、戦闘だ！」

「ああ、とびっきりの酒を用意しろ！（ヴィータ隊長への土産にしよう。）」

*

《管理局・地上本部》

「報告します！レジアス中将！」

「なんだ。」

いかにも、武人に見える風体の男、レジアス・ゲイズ中将が答えた。

「ミッド政府の艦隊を破り、四皇”赤髪”シャンクスと同じく、
紅き鉄鎚”ヴィータが接触しようとしています！」

「なにい〜！？」

*

《機動六課・訓練場》

「あれっ？」

スバルが声をあげた。

「どうしたの？」

「あれって船よね？」

「どれどれ。」

ティアナは望遠鏡を覗いて確認した。

「ん？…」赤髪”！」

*

ティアナはすぐに、その事をヴィータに伝えた。

「通してやれ！」

「でも！」

「安心しろ。あいつはお前らに手を出せねえ。良い酒を持って来た
だろな、馬鹿野郎が。」

船が埠頭に着き、錨を降ろした。

「来るか、”赤髪”。」

「君達は下がっておいの方が良いよ。身が持たないよ。」

黄猿がスバル達を隊舎に戻らせようとしている。

「身が持たないって一体……。」

フェイトが問いかけた。

「良いから、下がれ。」

青雫がそう言った後、スバルが突然倒れた。

スバルに続いて、キャロ、ルキノ、アルト、シャーリーが倒れた。

周囲が騒ぎ始めた。

「騒ぐんじゃないやねえ！ 気失ってるだけだ。」

「八神部隊長も半端な覚悟を持たない方が良いです。でないと、こうなります。」

「……。。」「」

すると、船から誰かが歩いてきた。

一瞬、凄まじい威圧感がなのは達を襲った。

『これが”赤髪” シャンクスの威圧感！？』

『ヴィータもこんな威圧感を出すのか?!』

『さすが、”赤髪”だね。』

「失礼。管理局の土地につき、少々威嚇をした。」

「全く、お前も成り下がったものだな。」

「土産の酒を持ってきました。話し合いたい事があります。」

「”覇気”を剥き出しにした男が言うセリフか？馬鹿言え！」

「ヴィータ…。」

シグナムが尋ねてきた。

「ああ。2人にしてくれ。」

*

「まさか、”赤髪”が来るとはな。」

「そんなにあの人って強いのか、ティア？」

「なんせ、父さんと一緒にロジャーの船に乗っていたからね。」

「えっ!? そうなの!?!」

「そうよ。（私も勝てる事が出来ないくらいの実力を持っている。）」

*

「お久しぶりです！ヴィータ隊長。」

「ああ。よく成り上がったものだな。ロジャー海賊団の見習いだつたお前が”四皇”だなんてな。」

「”黒髭” ティーチがここに来たと情報が入りましたが大丈夫でしたか？」

「ああ。エリオに用事があるって言ってた。」

「フェイト・T・ハラウオンの件ですが。ミッド政府の査察官がここに来るそうです。」

「…また、戦争が起こるのか。」

「…みたいです。ティアナは？」

「隊舎だ。呼べば、来るさ。」

「”茜髪” ティアナ・L・シルバースを呼んで下さい。」

*

「お久しぶりです！シャンクスさん。しばらくぶりですね。」

「ティアナ！久しぶりだな。」

シャンクスとティアナは、再会を喜び合った。

「どうしたのですか？私に用事って？」

「黒髭”ティーチがとんでもない話をしたらしいな。」

「フェイトさんの父親が”海賊王”ロジャーだったという話ですか？」

「ああ。俺からの提案だが、ミッド政府と戦争してみないか？」

「……。シャンクスさん、その提案は難しいと思います。」

ティアナが懸念する理由。

それは、レジアス中将がまだ地上本部に在任している限り目立つ行動が出来ないからだ。

「”赤鬼”レジアスか。」

「はい。」

レジアス中将も悪魔の実の能力者なのだ。

ちなみに、その実の名は超人系オニオニの実だ。

「とにかく。今は、フェイトさんを守らないといけません。どうし

たら良いかしら。」

「あたしらの海賊団をここに呼び寄せろ。」

「ヴィータ隊長。」

「ヴィータ副隊長。」

「心配するな。あたしの仲間には皆、七武海だ。」

「しかし！奴等がフェイトの命を！」

「焦るな、シャンクス！奴等はあたしの命令がない限り、そんな事はしねえ。」

「…分かりました。ヴィータ隊長、久しぶりにお話出来て嬉しいです。」

「ああ。またな。」

”赤髪” シャンクスは六課隊舎をあとにした。

*

「鉄鎚海賊団。奴等は危険だ。」

青雉はそう言った。

「どう言う事だ、青雉殿。」

シグナムが尋ねてきた。

「海侠”ジンベエ”、鷹の目”ミホーク”、暴君”くま、ドンキホーテ・ドフラミンゴ、サー・クロコダイル。」

ティアナが挙げていく名前にシグナムは表情を一変する。

「全員、王下七武海ではないか!？」

「クロコダイルは違っちよる。奴は七武海ではないが警戒が必要だ。」

「クロコダイルの後釜は”黒髭”ティーチだ。」

「あんな輩が七武海なのでしょうか?!」

「奴は”雷皇”エリオ・モンディアルを【次代最強の男】と言わしたんだ。」

「とにかく、今はフェイトを守っていかないとダメだ。赤犬、青雉、黄猿。お前らも頼むぞ。ミッドに”伝説の船員”だと言わせてやれ!」

「了解だ。」

「わっしも了解だよ。」

「了解しちよる。」

*

《????》

とある研究ラボに一人の男がいた。

紫の髪に金色の瞳を持つ男だ。

名はジェイル・スカリエッティ。

「クツクツクツクツ。やっとだ、この時を待っていた。」

「どうしましたの、ドクター？」

「ああ、ウーノか。とうとう、この時が来たのだよ。」

『革命の時』が来たのだよ!」

果たして、スカリエツティが言う『革命の時』とは？！

ミッドチルダで、一体何が起きると言うのか！？

11: "赤髪"との邂逅(後書き)

いろいろと長くなってしまい申し訳ありませんm()m

次回、『12: 三大将のとある休日part A』

スカリエツティが言う『革命の時』を阻止せよ!

12・三大将のとある休日 part A (前書き)

赤髪との邂逅で緊迫感が増した機動六課の面々。

そこで、1日を休日にした。

だが、そこには新たな”敵”の姿が…。

12・三大将のとある休日 part A

《訓練場》

「はい。今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様。」

いつもと変わらない終わり方だったが、なのはは終了を告げてある発表をする。

「でね、実は何気に今日の模擬戦が第二段階の見極めテストだったんだけど…。」

「『えっ!?!』」

「どうでした?」

「合格。」

「『早っ!?!』」

フェイトは即答。

「ま、こんだけみっちりやって問題ありなら大変だった。お前らはどうだ?」

「無難だな。」

「だいぶ、成長したねえ。」

「大丈夫じゃろ。」

黄猿達も良い評価をもらったティアナ達は大騒ぎした。

「デバイスリミッターも一段階解除するからシャーリーのところに行つておくようにね。」

「明日からはセカンドモードを基本形に訓練するからな。」

フェイト、ヴィータが説明するとキャロが

「はい。…って明日？」

「おお。訓練再開は明日からだ。」

「私達も午後から隊舎に待機だし。」

「皆、入隊日からずっと訓練漬けだったし。」

「…訳で。」

「皆は今日1日、お休み。街にも行って遊んでくると良いよ!」

「…は…いい!」「…」

ティアナ達の休日が始まった。

〈ティアナside〉

ヴァイス陸曹からお借りしたバイクでスバルと一緒に街中に駆け出
した。

「ティア、どこに行くの？」

「うん？ちよっと、父さんの所によ。」

*

「嘘でしょ？」

私達は目を疑った。

父さんのお気に入りの酒場が業火に包まれていたからだ。

「父さん！返事してよ、父さん！！」

「危ないよ、ティア！」

スバルが私を羽交い締めにした。

「離しなさいよ！父さんを助けに行くのよ。」

「そんなの消防士に任せて、ここにいて！」

スバルの言う事は分かるが今は、父さんを助けないと！

「ティアナか？」

誰かに声をかけられ、振り向くと

「父…さん？」

「ティアナ、おいで。」

「父さん!?!」

父さんの優しい声に私は嬉しくてつい、父さんに抱きついた。

「あはは。私を助けに行こうとしたのか？」

「うん／＼／」

「心配するな。こんな可愛いお前を見捨て死ぬ親ではない。」

「ごめん、なさい／＼／」

さっきまでの自分が恥ずかしくなった。

「嬉しいよ、ティアナ。そこで、頼みたい事があるのだが。」

「なに？」

「機動六課に行きたいのだが。」

父さんの頼みに快諾し、ヴィータ副隊長に説明した。

*

《機動六課・隊舎》

「大丈夫だったか？レイリー。」

「ああ。幸い、外出中だったからな。」

「”冥王”はそう簡単に死なないか。」

「死んでたまるか。ティアナの成長を見届けないといけないんだ。」

「…そうか。」

ヴィータはレイリーの父親らしい表情にフツと笑った。

「なんだ、ヴィータ。」

「いや、いかにも父親らしいなあ〜つてな。」

「そうか、父親っていうのは難しいな。」

「だな。ん？」

ヴィータはテレビに視線を変えた。

「また、このオッサンか。」

「”赤鬼”レジアス君か。懐かしい顔だ。」

「「「赤鬼」？」」」

「あのオッサンも能力者なんだよ。」

「へえ〜。あつ、自己紹介が遅れました。私はこの隊舎の部隊長、機動六課の課長の八神はやてです。」

「すると、君が”夜天の書”の主か。」

「えっ!？」

「どうして、それを?!」

「ロジャーもな、”夜天の書”の一部を持っていた。ヴィータから聞いた。」

「そうでしたか。えっと、私は機動六課スターズ分隊隊長、戦技教導官の高町なのです。」

「高町…。すると、君のお父さんは高町士郎か？」

「なぜ、父の名を!？」

「君のお父さんはね、【革命軍】にいたんだ。東の海【イーストブル】の革命家で”狂戦士”と恐れられた。」

「”狂戦士【バーサーカー】”、ですか？」

「革命のために、どんな任務をこなして来たけどね。ある日、大き

な怪我をしたらしい。」

「はい。父は交通事故で暫く、入院していました。」

「それをきっかけに彼は革命家をやめた。」

「”狂戦士”、奴も一人の父親か。」

赤犬は、懐かしげな顔で言った。

〈エリオside〉

「船員の皆さん。暫く、船を空けてごめんなさい…。」

僕は、船員の皆さんに頭を下げた。

船を空けるとは、船長としての品格がないからです。

「坊っちゃんの考えがあるなら、仕方ねえよい。」

マルコさんが迎えに来てくれました。

「それに、ティーチの野郎が坊っちゃんと会ったらしいからな。」

「はい。ティーチさんは、僕に用事があつたそうですから。」

僕がそう言っていると、ストラダに連絡が入った。

けど…すぐに切った。

僕達の邪魔する事は、許しません！

＼side・out＼

『こちらスターズ04、緊急事態につき、現場状況を報告します。サードアベニューF23の路地裏にてレリックと思わしきケースを発見。ケースを持っていたと考えられる小さな女の子が一人倒れています。』

『女の子は意識不明です！』

とスバル。

『指示をお願いします！』

その連絡を受けたフェイトがキャラコに指示を出した。

『キャラコ…。ごめんね、お休みは一旦中断。』

「大丈夫です！」

『救急の手配はこつちです。二人はそのまま、少女とケースを保護、応急措置をしてあげてね。』

なのはが二人に指示を出した。

＼エリオside＼

「マルコさん、一足先にクラナガンに向かってください。」

「了解よい。」

(念のために三大将の皆さんにも)

Side・out

《ミッドチルダ・首都》

そこには湿った空気が纏わりつく薄暗い路地裏。

女の子を保護していたFW部隊となのは達は合流した場所だった。

シヤマルがその少女の容体を一通り調べると安堵の息を漏らした。

「バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし、心配ないわ。」

「本当ですか!?!」

「良かったあ〜。。」

「甘く見るな!」

「えっ?!」

赤犬の怒号にスバルとティアナは頭を傾げた。

「今は良いかもしれん。が、いつかは儂らの敵になるかもしれん。」

「そう。エリオの坊っちゃんみたいな”四皇”が暴れるかもしれないし、ランスターのお嬢ちゃんみたいな剣聖が裏切る可能性だってある。」

「……………」

ティアナは青雉の言葉を噛み締めた。

なのは達は自分達の仲間に裏切られる可能性を考えていなかったが、言葉が出なかった。

「とにかく、今はその女の子を保護しておく必要があるねえ。」

黄猿の間延びした声で六課の面々はすぐに反応した。

「ケースと女の子はこのままへりまで搬送するから、みんなはこっちで現場調査ね。」

「……はいつ!」「」

「なのはちゃん、この子をへりまで抱いていってもらえる?」

「はい。」

（あの子から悪魔の实の能力を感じる。しかも、動物系・幻獣種か。）

青雉は少女が”普通”の少女ではない事を見抜いていた。

13・三大将のとある休日 part B

《ミッド上空》

一隻の帆船が浮かんでいる。

船首は、災いをもたらすという白鯨。

船の名は、『モビー・ディック号』という。

甲板には、行方不明になっているエリオの姿があった。

しかし、今のエリオは”管理局員”ではなく”雷皇”であった。

「マルコさん。」

「どうしたよ、坊っちゃん。」

「クラナガンの様子は、どうでしたか？」

「はつきり言って、腐っているよ。スラム街もあったよ。」

「…そうでしたか。」

マルコさんの話に、エリオは暗い顔になった。

「それに、ティーチの野郎が機動六課の奴らと接触するって言いだ
しやがったよ。」

「ティーチさんなら、大丈夫です。今の僕の気持ちを皆さんに代弁してくれますから。」

《クラナガン・地下水路》

地下水路には、地上部隊の局員でバリケードが張っている。

「聞いたか!?」黒ひげ”が、この近くにいるらしいぞ!」

「本当かよ!?」雷皇”が動き出したのじゃねえのか。」

2人の局員の足元に黒い煙が広がっている。

「なんだ、この煙は…!?!」

自分が飲み込まれていくのを、見て局員が慌てるがもう遅い。

2人の局員は、飲み込まれた。

「ゼハハハ!悪いが、通らせてもらうぞ!」

”黒ひげ”ティーチが、地下水路に入った。

六課のフォワード陣は、スバルの姉、ギンガと合流した。

「スバル、聞いたわ!エリオくんが行方不明だつて。」

「うん…。エリオの気持ちを、わかってあげられなかった。」

「「「……………」」」

「ゼハハハ！今更、後悔しているとは、情けねえ奴らだな。」

ギンガの目の前に、黒い煙が出た。

そこから、足が現れて

「そうやって、同情しても…。坊っちゃんは、帰ってこねえぞ！下らん！」

ギンガを踏みつけた。

「「黒ひげ」！」

「久しぶりじゃねえか、オメエら。」

「エリオ君を、返して！！」

「ゼハハハ。そいつは出来ねえ相談だ。坊っちゃんの気持ちを知ろうとしなかったオメエらが悪いからな。所謂、自業自得って奴だ。」

キャロの叫びも虚しく、ティーチの耳には聞こえなかった。

「だったら…。」

「ん？」

スバルの体から蒸気が出ている。

「貴方を倒し、エリオを取り戻す！ゴムゴムの…。」

スバルは、狙い打ちの構えをとった。

「JET！」

ティーチの腹に

「銃【ピストル】！」

渾身のパンチを繰り出した。

「くっ！」

ティーチは、なんとか堪えた。

「オレに手を上げたら、どうなっても知らんぞ。」

「そんなの関係ない！ゴムゴムのJET…。」

「闇水【くろつず】！」

ティーチの左手から黒い渦が現れた。

渦から発する引力がスバルを捉えた。

「なっ！」

スバルは、ティーチに捕まった。

「スバルさん！」

「雷皇海賊団に反抗するって事か？笑わせるんじゃない！」

ティーチは、そう言いながらスバルを床に叩きつける。

「がはっ！」

「血！？スバルの体は、ゴムのはずじゃ。」

ティアナは、いち早くスバルの異変に気付いた。

「ぐわあああ！」

床で藻掻くスバル。

「ティアナ、もう気付いたんじゃないか？」

「ティアさん…。」

「キャラと同じ、自然系ヤミヤミの実の能力者か。」

「えっ…？」

「その通り。オレは正真正銘のヤミヤミの実の闇人間だ！オレが出来る限り、坊っちゃんの手を汚す事をさせない。分かったか、管理局よ！オレの前じゃどんな能力も無力化になっちまうぜ！ゼハハハ！」

豪快に笑いながらティーチは、闇に消えていった。

「なのはさん、ティアナです。”黒ひげ”と接触、スバルとギンガさんがやられました。至急、こちらに来てください。」

・
・
・

「ティアナ！大丈夫だった？」

「私は、大丈夫です。ただ、”黒ひげ”は『坊っちゃん』は、オメガらに失望した！自業自得だ！」と言っていました。」

「……………」

「なあ、ティアナ。あいつは、何者なんや？」

「それは…私にも分かりません。すみません、八神部隊長。」

「ええよ。とりあえず、隊舎に戻ろうか？」

《ミッド上空》

「雷皇、クルーの後始末をなんとかしろよ。」

「それなら、大丈夫です。ティーチさんには”ある任務”をやっってもらいますから。」

「ある任務って…まさか！？公開陳述会の妨害か！」

「はい。ティーチさんの襲撃とDr・スカリエツィのガジェット軍団の撃滅で管理局は戦力が集中すると思います。そこで、僕達が六課隊舎を襲撃します。」

「待て！正気か？！俺達、三大将もいるんだぞ！」

「…その時は、グイータ副隊長率いる鉄鎚海賊団にお任せしますが。」

「……………。分かった、この事は俺達三大将だけに伝えれば良いだな。雷皇さんよ。」

「はい、ありがとうございます。」

エリオは、青雩との会話を終えた。

「…………フェイトさん、ごめんなさい。やはり、貴女に僕自身の事を話すべきではありませんでした。」

エリオは、後悔した。

「坊っちゃん、後悔する事はねえよい。」

「マルコさん。」

「俺たちは、オヤジが死んだ直後からずっとエリオの坊っちゃんの元で海賊をやって来た。今更、後悔はねえよい。」

マルコの言葉を深く受け止めたエリオは、立ち上がって

「雷皇海賊団の諸君！いよいよ、海賊の意地を見せる時が来ました！今更には退かないつもりでいて下さい！」

エリオの言葉で、雷皇海賊団は気合いを引き締めた。

「ん？ヴィータ副隊長からだ。はい、エリオです。」

「エリオ。オメエに渡したい物がある。明日でも、そっちに行くかな。」

「それは、構いませんが。八神部隊長には？」

「心配するな。オメエの様子を見に行くって言うてあるからな。」

「既に手を打っていましたか。分かりました！明日、船の甲板で待っています。」

《機動六課隊舎》

「（白ひげ。エリオの奴をあそこまで成長させたな。大したものだぞ。）」

ヴィータは、酒を飲みながら亡き戦友に言った。

「（エリオの奴が考えた作戦は上手くいく。ただ、なのはとフェイトがこの作戦に気付かれたらどうする？念のために、ジンベエ達には連絡してあるが。まあ、良いか。）」

ヴィータは、空に輝く2つの月を眺めながら酒を楽しんだ。

次回予告

”雷皇”と”紅き鉄鎚”

ミッドチルダに群がる数多の海賊の中で”史上最強”と謂われる2人の大海賊がついに邂逅する。

『14：“雷皇” & amp; “紅き鉄鎚”』をお楽しみに！

13・三大将のとある休日 part B (後書き)

オリジナル展開まっしぐらだぜ！

次回も見てね(^^)ゞ

14 : " 雷皇 " と " 紅き鉄鎚 " ; (前

” 雷皇 ” と ” 紅き鉄鎚 ”

『 四皇 』 と 言 わ れ る 大 海 賊 の 2 人 は 、 ミ ッ ド 上 空 で 会 談 が 行 な わ れ
る。

そ し て 、 ” 黒 ひ げ ” の 暗 躍 が 着 実 に 進 ん で い る。

《ミッド上空》

イルカの船首を持つ『ポセイドン号』 - 「鉄槌海賊団」の船だ。

船首には、ヴィータの姿があつた。

「女将さん、雷皇に何を渡すんじや？」

ジンベエザメの魚人、”海侠”ジンベエが尋ねた。

「白ひげの遺志が詰まった「グラグラの実」だ。」

「白ひげの親父さんの遺志…。」

「船長、モービー・ディック号だ。」

くまが、報告した。

「よし、私はエリオに会いに行く。オメエらは船で待機だ。」

「待機って、暇でしょうかありませんよ。」

鳥の羽が大量についたコートを羽織る男、ドンキホーテ・ドフラミンゴがヴィータに尋ねた。

「ドフラミンゴ。まあ、そう言っな。」

ヴィータは、そう言いながらエリオの元に向かった。

・
・
・

「お久しぶりです！ヴィータ副隊長、お元気そうで何よりです！」

「おう、エリオも元気そうじゃねえか。」

「あの、渡したい物ってなんですか？」

「……白ひげの遺志が詰まった「グラグラの実」さ。」

「えっ!？」

「女将！親父の能力を坊っちゃんに継がせる気がよい。」

「ああ。これは、戦友であるあたしの言い分だ。」

「…分かりました。」

「坊っちゃん！悪魔の实の能力を2つ以上、身に宿すと破裂すると
言うよ！正気かい！」

「覚悟は、出来ています！いただきます。」

エリオは、悪魔の实を食べた。

「……………」

「くっ！相変わらず、不味いですね。」

エリオは、ケロツとしている。

「…破裂しない。やはり、エリオは白ひげの後継者だな。」

「親父…。」

「ニューゲートさん…。」

「さて。渡す物は、渡した。とんずらくか。」

「ありがとうございました。」

”雷皇”と”紅の鉄騎”の会談は、こうして終わった。

《????》

「ゼハハハ！久しぶりじゃねえ、スカリエッティ。」

「そうですね、ティーチ。いや、”黒ひげ”。」

”黒ひげ”とスカリエッティだった。

「まあ、挨拶はいい。襲撃の計画は、どうだ。」

「既に練っています。後は、タイミング次第です。」

「坊っちゃんの前張り次第ってわけか。例の小娘は、坊っちゃんに預らせてもらうぞ。」

「了解しました。任せておきたまえ。」

「なぜですか、ドクター！あの子は、”聖王”の後継者ですよ！」

No.？ウーノが反論した。

「ゆりかご」は、確かに我々には必要。しかし、私自身は雷皇海賊団の零番隊長。船長には逆らえない身分なんでね。許してくれ、ウーノ。」

「はい…。」

ウーノは、スカリエッティに諭された。

《六課隊舎》

「ただいま。」

「おかえり、ヴィータ。」

「はやて。」

「ヴィータ。エリオは、どうやった？」

「元気そうだった。」

「そうか…。公開陳述会の警備、しっかり頼んだよ。」

「うん」

「（なんも起こらない事を祈るしかない！エリオ、一体どこにおるんや。）」

行方不明になったエリオを心配するはやてだった。

《ミッド海上》

モービー・ディック号を先頭とする雷皇海賊団の船団が降下した。

「いよいよですね、マルコさん。」

「そうだよい。管理局VS雷皇海賊団の戦争が始まるよい。」

「そうですね。もしも、エリオです。お久しぶりです、黄猿さん。」

「久しぶりだねえ。雷皇。本当に戦争を起こすのかねえ。」

「…もう、後戻りには出来ません。」

「そうかねえ。わっしらも協力するからねえ。」

「全ては、ミッドに住む人達のため。そして、新時代の到来のため
に。」

「そうだねえ。そして、管理局の改革もだねえ。」

「はい…。だから、僕は元世界政府幹部のスカリエツティさんに依頼したのです。」

「分かった、サカズキにはわっしから言っておくよ。」

「ありがとうございます。では、よろしくお願いします。」

「坊っちゃん…。そろそろ準備を。ティーチも、地上本部に着いたみたいから。」

「そうですね。では、行きますか。」

『モービー・ディック号、浮上せよ!』

この号令にて、開戦。

そして、”雷皇”の実力がミッドチルダに激震が走る事になる。

・ 続く ・

ワンピース原作の白ひげVS海軍の頂上決戦に沿った流れになると
思います。

期待して、待ってください！

次回『15：機動六課VS雷皇海賊団 part A』

エリオ・モンディアルの設定について

デバイス：スレイニル（モデル「Black Cat」のベルゼー
の武器）

悪魔の実の種類

・自然系ゴロゴロの実

・超人系グラグラの実

バリアジャケットは、インナーが長袖になり、コートをマントのよ
うに羽織る。

ズボンが長ズボンになる。

通り名：“雷皇”

『史上最強の大海賊』

『海賊王に最も近い男』

『”白ひげ”の後継者』

15・機動六課VS雷皇海賊団 part A（前書き）

ついに、始まった公開陳述会。

そして……雷皇海賊団と機動六課の戦争が……。

15：機動六課VS雷皇海賊団 part A

《ミッド・管理局地上本部》

質量兵器『アインヘリアル』に関する会合が開かれた。

所謂、「公開陳述会」だ。

かの”三提督”も同席し、”三大将”も同席した。

「この『アインヘリアル』は、我が地上本部の希望なのです！本局やミッド政府に対抗出来るはずでしょう。」

レジアスが演説していた。

すると

「申し上げます！ミッド湾岸地区、機動六課隊舎沿岸に『モビー・デイク号』の姿が！」

「「「！！！！？？？」」「「「

「映像を出せ！」

《六課隊舎》

「”雷皇”だ！」

「なんで、ここに！？」

「落ち着いて。今から、私達が迎撃するから。非戦闘員の皆を避難させて。」

シヤマルが、指示を出す。

「アイスエイジ氷河時代！」

海を凍らせたおかげで、船が動かない。

「エリオSide」

「キャラカ。全く、迷惑千万ですね。でもこれが、進軍させるチャンスとなります。」

「坊っちゃん…どうしますか？」

「とりあえず、14人の隊長達だけで。」

「ゼストには、いつ合図を？」

「必要ありません。では、追撃開始！」

「六課Side」

「雷皇の隊長達だ！迎撃しろ！」

「海賊ごときに我々は、負けはしない！」

「砲撃魔法で応戦しろ！『モビー・ディック号』を破壊しろ！」

なのは達が、反応した。

「良い事を教えてやろう、高町なのは！お前の義兄、”火拳”エースの復活祭だ！」

「えっ？エースさんの復活？本当に？」

「よく、目を閉じて心の奥底でエースに話しかけてみる。」

「はい。」

なのはは、目を閉じた。

『エースさん、聞こえますか？』

『よっ！元気だったか、なのは。』

『はい。エースさんと話せて良かった。』

『俺もだ、なのは。そっちに会いに行くぞ。』

なのはの体が炎に包まれた。

「来るのか、”火拳”！」

炎が、小さくなった。

「久しぶりだな、ティーチ。」

「ゼハハハ！久しぶりだな、エース！」

『火拳”エース、再臨！』

「エース兄さん！」

「なのは、えらい美人になったな。」

「ふえ！？そうかな／＼」

「ゼハハハ！お前の体は、どうだ。高町なのは！」

「……………」

なのはは、自分の左手に意識を集中させた。

すると、炎が灯った。

「お前の能力を犠牲に、復活はしたくないからな。」

「じゃあ、キャロの能力を？」

「ああ。あのお嬢ちゃん的能力は、コピーだからな。あと、ついでにヤミヤミの実の能力も犠牲にしてな。」

「なんか、キャロが可哀想……。」

「いや、そこにいる三大将の能力があるからな。」

エースは、三大将の方を向いた。

「 ”火拳” も、人の子という事か。」

「 堂々としちよるわ。」

「 久しぶりだな、 ”火拳” 。」

「 悪いが、エリオの元に向かわないといけない。行くぞ、ティーチ。」

「 ゼハハハ！ ああ、行くか。エース ”元” 隊長。」

《六課隊舎》

機動六課と雷皇海賊団の激闘が続く。

「 エリオくん！ お願い、目を覚まして！」

「 ごめんね、キャロ。神の裁き」エル・ツール」！」

雷のビームが、六課隊舎に直撃した。

「 なら、私が覚ましてあげる！」

「 ロード：ヒエヒエ」

「 アイス塊、両棘矛！」

氷の矛が、エリオを襲う。

「 稲妻！」
サンゴ

稲妻を発し、矛を破壊する。

「神に等しい力、自然系ゴロゴロの実。そして…。」

エリオは、左拳を突き出す。

すると、大気にヒビが入った。

《地上本部》

「まさか、あれは…。世界を滅ぼす力、グラグラの実だ。」

レジアスは、一瞬だがエリオを”白ひげ”に見えた。

はやてとフェイトが立ち去ろうとしたが、レジアスが止めた。

「”雷皇”は『海賊王に最も近い男』となった！無駄な抵抗は、よせ！」

「エリオは、私達の仲間です！連れ戻します！」

「分からないのか、八神はやて！あの小僧は、もう管理局を裏切った。立派な海賊なんだぞ！2度と管理局には、戻らん！連れ戻すなら、小僧を逮捕しろ！」

レジアスの忠告に、フェイトは号泣し始めた。

はやては、苦虫を食った顔をした。

《六課隊舎》

エリオの攻撃により、ほぼ全壊となった隊舎。

「雷皇”はやはり”白ひげ”の後継者だったんだ！」

「勝てねえ相手だ！」

「うおりやちゃ〜！」

スバルが、突撃する。

しかし

「無駄だよい。」

マルコの妨害で、失敗した。

「こちら、4番隊長のゼスト。例の少女を確保した。」

「よし！雷皇海賊団、これより、総攻撃を仕掛けます！」

16：機動六課VS雷皇海賊団 part B

「今から、”雷皇”の実力の見せ場です！皆さん、僕について来てください！」

エリオは、そう言いながら『モビー・ディック号』から飛び降りた。

「来るぞ！”雷皇”が暴れるぞ！」

”紅き鉄鎚”を超えた『史上最強の大海賊』だ！」

「坊っちゃんに、道を開ける！」

（六課Side）

ティアナは、5番隊隊長”花剣”ビスタと剣を交えていた。

「まさか、貴方と剣を交えるとはね。」

「それは、こっちの台詞だ！”茜髪”よ！」

「エリオはなぜ、こんな事を？」

「新時代の到来。ミッドの解放のため。それだけだ。」

「……。」

ティアナは、黒刀を納めた。

「どうした？」

「なら、私もその”新時代”の到来を見届けるとしますか。」

「義父のためか。」

「ええ……。」

（エリオSide）

「……………」

エリオは、自分がいた六課隊舎を見つめた。

「エリオ！」 白ひげ” やヴィータに毒されたのか?!」

シグナムがエリオに諭す。

「六課の魔導師だ！」

「シグナム二尉だ！」

「僕は、自分の意思表示したまでです。」

「そうか……。」

シグナムは、エリオの元へ突っ込んだ。

「なら、私がおその意思を否定するだけ！」

「……………」

エリオは、シグナムの怒涛の一撃を片手で止めた。

「邪魔しないでください。」

「主はやての元へは、行かせるか！」

「……………」

エリオは、スレイニルを地面に突き刺した。

そして、両手で大気を掴んだ。

「フン！」

グイッ！

そして、大気を引っ張った。

グラッ！

「なに！？ば、バランスが！」

なんと、大地が傾いた。

「隊舎が傾いているぞ！」

ドンッ！

すかさず、エリオは体勢を立て直そうとするシグナムを殴りつけた。

地震の衝撃を受けたシグナムは、気絶した。

それだけでは、終わらなかった。

「こっちに迫ってくるぞ！」

地震の衝撃は、六課隊舎まで到達した。

「おい、見る！八神部隊長の思いが詰まった隊舎が酷い姿になったぞ！」

《地上本部》

「シグナムがやられた?!」

「私達の隊舎が……。」

フェイトとなのはが呟いた。

「エリオ…絶対に許さへん！」

はやては、シヤマルに通信した。

「シヤマル！うちらも今から、隊舎に戻る。それまで、エリオ達を逃がしたらあかん！」

「了解！」

《六課隊舎》

「なのはさん達が来るまで耐える！」

「フェイトさん、八神部隊長……。」

「坊っちゃん！」黒ひげ”と”火拳”が来ました！」

「よっ！立派な船長になったな、エリオ。」

「お久しぶりです、エースさん。早速ですが『モービー・ディック号』周辺の氷を解かしてもらえませんか？」

「ああ……。大炎戒！」

・
・
・

「なんだ?!あの炎は。」

「あれは……”火拳”エースだぞ！」

「確か、”白ひげ”と共に死んだはずだぞ！」

「おい、見ろ！デカイ火の球だ！」

「炎帝！」

エースが作った火の球は、『モビー・ディック号』周辺に落ちた。

「氷を解かしたただと?!”雷皇”め!逃げる気か!」

「これ以上の争いは、無意味です。管理局の愚かさが改めて知りました。」

「待つて、エリオ!」

上空へ浮上する『モビー・ディック号』を追跡するのは、はやてとフェイトだった。

『兄さん、ヴィヴィオは?』

『心配するな!俺が強くなるから、安心しな!』

『兄さんがいるなら、大丈夫です。ヴィヴィオをよろしくお願いします。』

実は、なのはが追跡しないのはエースとの協約があるからだ。

ヴィヴィオを強くしてから返還する事で、合意していた。

「なのはさん、ヴィヴィオを暫く預かります。」

「うん!ヴィヴィオをよろしくね」

「エリオ!お願いだから、戻って来て!ヴィヴィオを返して!」

「よくも、シグナムを!」

「3000万V、ジャムウフル雷龍」

雷の龍を召喚した。

「今の部隊長達では、僕達には勝てません。では、さようなら…。」
雷龍がフェイト達を飲み込んだ。

こうして、機動六課VS雷皇海賊団の戦争は『史上最強の大海賊』
になったエリオが率いる雷皇海賊団の圧勝に終わった。

《ミッド上空》

「エース叔父さん。なのはママは？」

「なのはとは、暫く会えない。だが、必ずなのはの元へ帰す。だから、暫く叔父さんで我慢してくれないか？」

「会えないのは、寂しい。けど…叔父さんからはママのお話が聞けるから我慢する！」

「そうか…。」

エースは、まだ幼い姪を抱きしめた。

「叔父さん、暖かい。なのはママと同じだ。」

「それは、良かった。」

「……………」

船首にエリオの姿があった。

「坊っちゃん、どうした？」

ティーチが尋ねる。

「これからの管理局は、どうなるでしょうか？」

「ゼハハハ、それは戦力を増強するだろ！」

「いや、私がここにいる限りではそれは出来ない。」

スカリエッティが否定した。

その後ろには、ナンバーズの姿もあった。

いると言っても

NO・？ウーノ、NO・？ドゥーエ、NO・？トール、NO・？セ
ツテ

の4人だ。

「なんせ、管理局はかの”三提督”と最高評議会がいる。今すぐには再生は出来るが、時間がかかる。」

「最高評議会…。管理局を支配する独裁者ですか。」

「違うよ。」

ドゥーエが、否定した。

「最高評議会は、ただ生きたいだけ。生きて、自分たちの後継者が現れるのを待っているのよ。」

エリオの肩に頭を乗せながら言った。

「あ、あの／＼離れてくれませんか？」

「どごして？」

「ドゥーエさんが、綺麗で僕にはふさわしくない人だからです／＼」

「優しいのね　ますます、惚れちゃった／＼」

「僕で良ければ／＼お付き合いしませんか？」

「うん、いいよ／＼」

この事により、ドゥーエとエリオは「美男美女の最強カップル」と言われるようになった。

「それでは、今からの行動計画を発表します。暫く、ミッドチルダを去ります。これは、管理局が僕達を追跡調査をする可能性がある

からです。」

「なるほど、一理ありますね。我々の今回の行動で、他の海賊達がどう動くのか見極めたい。そうですね、エリオ船長。」

「それもあります。ですが、ヴィータ副隊長がおられますから。暫くは、大丈夫です。それに、シャンクスさんも。」

「“赤髪”と“紅き鉄鎚”か。『四皇』の2人がミッドにいれば、並大抵の海賊なら行動が起こせないな。」

ティーチがスカリエツティとエリオの意見に賛同した。

「これより、次元転移を行います。場所は、廃棄世界N0・48。名称は「ヴェルサス」総員、転移準備せよ！」

エリオの指示で、次元転移準備を開始した。

《管理局本局》

「“雷皇”め！とうとう”白ひげ”に似た行動を起こしたな！」

「グラグラの実は「世界を滅ぼす力」と言われる。用心しとかなないとな。」

「だけど、”雷皇”の存在で他の海賊の抑制にはなっていた。彼がいなくなると、海賊どもが何をするか分からない！」

「それもだ！他の海賊どもも、管理局に攻撃を仕掛けるかもしれん。」

今まで以上の警戒が必要だ。」

《六課隊舎》

すっかり全壊した隊舎を見つめるはやて。

「ここで、終わる六課やない！絶対にエリオの目を覚ましてみせる！」

はやては、新たな闘志に燃えた。

「無駄だと分かちやらん！」

「確かにねえ。」雷皇”は『史上最強の大海賊』、『海賊王に最も近い男』となった。彼女らの実力と彼の実力は「雲泥の差」があるよ。」

赤犬と黄猿がそんな会話をしている。

「よく考えると、”雷皇”って元白ひげ海賊団零番隊隊長だよな。

『白ひげの後継者』って呼ばれるのも無理もない。」

「「えっ?!」」

はやてとフェイトが反応した。

「エリオの坊主はな、あんたと出会う前に白ひげに才能を見出だされた。そして、白ひげ海賊団の零番隊隊長になった。更に、悪魔の実の能力も手に入れた。」

青雉が、エリオの経緯を話した。

「エリオ…。」

「とにかく、エリオを捕まえて反省させるんや。」

「それには、あたしは反対する。」

「ヴィータちゃん…。」

「エリオの件で、他の海賊達が管理局に攻撃する可能性がある。それを防ぐのが今のあたしらの仕事だ。『四皇』もどうなるか分からん。」

「赤髪”はんは、ヴィータ？」

「シャンクスは、あたしの教え子だ。師匠には逆らえない。問題は…。」

「『『四皇』の一人、”暴れ者”カイドウ』」

三大将揃って、名を挙げた。

「あんの野郎が、何をすることが問題だ！」

「そうか…。でも、エリオを覚ましてあげるのが先や！」

このはやての決断が、後に大事件を起こす。

）
続
く
）

16：機動六課VS雷皇海賊団 part B（後書き）

改めて見ると、エリオがかなりチート化した！

まあ、良いけどね

小説に関する意見や感想があれば、気軽に投稿してください！

次回『17：雷皇海賊団大追跡網』

お楽しみにノシ

17：雷皇海賊団大追跡網（前書き）

歴史上の大敗を喫した機動六課。

報復として、『雷皇海賊団』を追跡する事にした。

17：雷皇海賊団大追跡網

《アースラ》

六課隊舎の襲撃から、早くも2年が経とうとしていた。

六課隊舎の修復をすでに、終わっている。

しかし、活動拠点をアースラに移した機動六課の面々。

エリオ達を追跡調査をしているが、結果が得られていない。

「状況は、聞いた。厄介な事になったな。」

六課の後見人で、フェイト義兄のクロノがはやたと話していた。

「ありがとうな、クロノ君。」

「やはり、エリオは行動を起こしたか。」

「どういふことなんや？まさか、本局はエリオが”雷皇”だって知ってたんか？」

「その、まさかだ。上層部は勿論。我々にも情報が入っていた。」

「なんで、早く教えてくれへんかった？」

はやては、怒気を交えてクロノに尋ねた。

「それは……彼からの希望なんだ。『自分の事は、自分に任せてください。』と僕に頼んだ。」

「エリオは、相変わらずの律儀やな。」

「これからどうする？まさか、エリオを追いかけろのか？」

「その、まさかや。」

「『雷皇海賊団』を甘く見るな！政府も、警戒レベルを上げたからな。なんせ、奴らの他には”大渦蜘蛛”、”雷卿”、”遊騎士”、”氷魔女”の傘下四天王がいる。」

「どえらい事になったな。クロノ君、何か分かったら連絡してな。」

「ああ…。」

《ヴェルサス》

一面が海となっている廃棄世界。

そこに『モビー・ディック号』が浮かんでいた。

「よし、ヴィヴィオ。俺にパンチを入れろ！」

「うんー！」

ヴィヴィオとエースが対峙している。

「剃」

六式の体技の一つ”剃”を使い、エースの懐に入る。

「指銃「獣敵」」

渾身の殺人パンチが、エースを襲う。

だが、エースの体は炎なのでダメージがない。

「もう。エース叔父さんズルいよ！」

「仕方ないよ、ヴィヴィオ。エースさんは、なのはさんと同じ「メラメラの実」の能力者だから。」

エリオの説明もあつたが、ヴィヴィオは納得しなかった。

「ズルいよ！うわあぁ〜ん！」

ヴィヴィオが、泣き出した。

エリオは、咄嗟にヴィヴィオを抱きしめた。

そして、頭を撫でた。

「よしよし、ごめんね？でも、ヴィヴィオが”六式”を皆伝して、悪魔の実の能力を重ねるとなのはさん以上の強さが身に付くだよ。」

「えっ？私にも能力があるの？」

「なら、ヴィヴィオ。右手に意識を集中させてみて？」

ヴィヴィオは、自分の右手に意識を集中させた。

すると、鳥の翼になった。

更に、青い炎と冷気を纏っている。

「これで、核心したよ。」

「エリオ、聖王陛下の能力はなに？」

エリオの腕に抱きついたままドゥーエが尋ねる。

「あの／＼ドゥーエさん、む、胸が／＼」

「良いから、答えて？」

「動物系幻獣種トリトリの実モデル鳳凰」ゴッドバード「…簡単に言うとマルコさんと同じ幻獣種的能力者です。」

「へえ〜。エリオは詳しいね」

チュツ。

ドゥーエは、エリオの唇にキスした。

「ドゥーエさん／＼僕だけだとズルいので、ドゥーエさんに

も／／／「チュツ。

お返しのキスをした。

「エリオ／／／大好きだよ／／／」

「あつ、それとドワーエさんにプレゼントです。はい、どうぞ」

「あ、悪魔の実?!」

トーレが驚くのも無理もない。

悪魔の実その物は、希少価値が高い。

値段は1億以上となる。

「嬉しいなあ 種類は、なに？」

「”異端”と言われる自然系ウミウミの実です。」

「通常、悪魔の実は”海”が弱点のはず。だけど、稀に”海そのもの”を宿した悪魔の実が宿するという。」

ウーノの捕捉説明のおかげでドワーエは

「それが、この「ウミウミの実」なのね ありがとう、エリオ／／／」

チュツ。

「ドゥーエさん／＼大好きですよ／＼」

エリオからのキスにドゥーエは

「もう／＼エリオたら、優しいのね／＼」

と顔を真っ赤にした。

もはや、ラブラブカップルだ…。

「坊っちゃん！ヤバいっすよ！管理局の奴らが、俺たちを探していますぜ！」

「落ち着いてください！ここを見つかるなんて、滅多にないことです。万が一のため、モービー・ディック号を浮上させます。」

「了解！モービー・ディック号の浮上準備開始！」

「（やはり…八神部隊長達ですか。さて、ここを見つけれられますかな？）」

《アースラ》

「次元転移の反応は、あるんか？」

「未だに、ありません！」

「そっか…。（絶対に見つかるんや！）」

《管理局本局》

クロノとヴィータが対談をしている。

彼は、はやて達の行動に懸念を抱いた。

「ヴィータ。ミッドは、大丈夫か？」

「心配いらん。あたしら『四皇』がいる限り、そう易々とは動かねえよ。」

「“雷皇”の存在は、とても脅威だ。しかし、同時に海賊達の抑制にもなっていた。」

「なんとかするしかないな。」

「ヴィータは、良いのか？はやてと一緒にじゃなくて。」

「あたしには、ミッドでやらなきゃならねえ事があるんだ。何しろ、あたしは、“紅き鉄鎚”だからな。」

「……………」

《ヴェルサス》

孤島で、ヴィヴィオが一人で、技を極めていた。

引率は、トーレだ。

「嵐脚「凱鳥」」

大型の鳥を思わす鎌風を繰り出す。

「月歩」

爆発的な脚力で、空を蹴る。

「嵐脚「白雷」」

上方から鎌風を打ち落とした。

ヴィヴィオは、飛行魔法も出来るが

「魔法よりこっち（六式）の方が勝手がいいよ」

という事だ。

「お見事です。聖王陛下。」

「あんまり、陛下って言わないでよ。」

「いえ、しかし…貴女はミッドチルダの王となる御方です！」

「いずれです。」

ヴィヴィオは、謙遜している。

まだ幼い自分が王になる資格なんてあるわけがない。

そう考えていた。

しかし、自分のはかの”聖王”の器を持つ人間だと知った。

その日から、さらに自分の体技を極めないといけないと感じたヴィオ。

こうして、孤島で修業をしている。

「私って本当に”聖王”になれますか？」

「はい。きっと、いえ。必ず、なれます。ミッドの人々を導く強き”聖王”に！」

トーレは、次期聖王にこう断言した。

「なら、頑張つて強くなります！強くなって、なのはママを助けたい。」

ヴィオのオッドアイには、熱き闘志に燃えていた。

《アースラ》

「八神部隊長！『モビー・ディック号』を発見しました。場所は廃棄世界No.48、名称「ヴェルサス」です。」

シャーリーが、そう報告した。

「そうか……。やっと見つけたで、エリオ。覚悟しいな？」

はやては、改めて決意を表した。

《ヴェルサス》

「坊っちゃん！管理局が、こつちに来ますぜ！」

「『モビー・ディック号』、浮上！」

白鯨が、空を泳ぐ。

アースラから、フェイトを筆頭に次々と『モビー・ディック号』に乗り込む。

「一体、なんの用かい？管理局《お役所》が。」

「建造物破壊及び公務執行妨害で逮捕します！」

「そんな事をしたら、ミッドの海賊達が暴れ出すよい。良いのか？」

「マルコさん。フェイトさんは、海賊を甘く見ているので。」

「…俺たち『雷皇海賊団』を甘く見ると、どうなるか分かっているのかい？」

「『四皇』を捕まえるなんて事をするとは…豪胆なお嬢さんだ。」

鎧を着た大柄の男、3番隊隊長”ダイヤモンド”ジヨズが警告した。

「エリオ、今ならまだ間に合うよ。お願いだから…。」

「その甘ったるい台詞を言いに来たのですか、フェイトさん？」

エリオは、フェイトの説得を一刀両断した。

「言ったはずです。僕たちは、あなた方に屈しません！僕は『四皇』の一人、”雷皇”です！それでも、捕まえたいなら…僕を倒してからです！」

エリオの発言力の強さに、フェイトは言葉を失う。

「そういう事だ。船から出ていってもらうか？」

「…倒したら良いよね？」

「そうですが…。」

「分かった！エリオを倒すよ！」

・
・
・

バリアジャケットを纏う両者。

「いつでも、どうぞ。」

エリオは、余裕綽々だ。

「分かった！」

フェイトの得意戦法である超高速機動で、エリオを錯乱する。

だが…。

「動きが丸見えです。1億V、雷神鎚「ミヨルニル」」

フェイトの背後を突き、スレイニルで、叩きつける。

「がはっ！」

「言ったはずです。ゴロゴロの実は、『神に等しい力』と言われて
います。魔法による高速機動なんて遅いです！」

それもそうだ。

雷の速度は、光速よりはかなり遅いが秒速150？だ。

そこらへんの高速では、追いつけないのだ。

「あっ！ティアさん…。」

「ティアナって、”茜髪”か?!」

「元気そうじゃないの、エリオ。」

「は、はい。」

「私もね、義父さんのために頑張ってきたの。」

「レイリーさん…。」

「正直、今の管理局じゃ義父さんの想いに答えてあげられない。だから…私を船に居させてくれないかな？」

「勿論です！ティアさんなら大歓迎です！」

こうして、“茜髪”ティアナ・L・シルバースは、雷皇海賊団と共に行動する事にした。

（続く）

17：雷皇海賊団大追跡網（後書き）

テイアナまで、アンチ管理局派になってしまった。

どんな展開になるやら）、（

次回『18：和平交渉』

18：和平交渉（前書き）

六課隊舎襲撃から2年が経った。

管理局から和平交渉の話が持ちかけられた。

18：和平交渉

《ヴェルサス》

「坊っちゃん、大変だ！また、管理局の連中だぜ！」

「…ミゼット提督。」

管理局の三提督の一人、ミゼット・クローベル統幕総議長が、『モビー・ディック号』に乗り込む。

「おや！ティアナさんもいましたの？」

「お久しぶりです、ミゼット提督。」

「ミゼット提督のような人が、僕に何の用事でしょうか？」

「機動六課との紛争を終わらせに来ましたの。」

「…それが、本局の言い分ですか？」

「本局ではなく、私個人の言い分ですよ、”雷皇”さん。」

「…ミゼット提督には、いろいろとお世話になりました。」

「そうね。あなたが、研究施設から救ってくれたのは”白ひげ”だったね。それから、管理局に入れたのは私達”三提督”だったね。」

「そうです。ニューゲートさんには、これ以上ない大恩があります。」

「そうよね、彼は偉大な海賊だったからね。」

「ニューゲートさんの遺志を、僕が受け継ぎます！それが、大海賊“雷皇”の“白ひげ”への恩返しなのです。」

「…エリオ。」

「…分かったわ。私から、はやてさんに話しておくね。」

《六課隊舎》

「ミゼット提督からの提案で、ミッド海上にてエリオとの和平交渉が行われる。仲介者は、なのは隊長にお願いしている。なのは隊長、よろしく頼みます。」

《ミッド海上》

『モビー・ディック号』が、姿を現した。

海岸警備隊は、監視を続けた。

機動六課の代表として、なのはが、船に乗り込む。

「お久しぶりです、エース兄さん。そして、エリオも。」

「お久しぶりです、なのはさん。」

「相変わらず、無茶してねえか？」

「大丈夫だよ あれ、ヴィヴィオは？」

「なのはママ〜！」

そこには、すっかり成長した愛娘がいた。

「まあ〜ヴィヴィオ！こんなに大きくなって。元気だった？」

「うん」

ヴィヴィオは、満面の笑顔で答えた。

「エリオ、ありがとうね ヴィヴィオを強くしてくれて。」

「いえいえ。僕は、基本的な事しか教えていません。後は、ヴィヴィオ自身の努力です。ですよね、エースさん。」

「ああ。しかし、親子って本当に不思議だな。なのはと同じスピードで、ヴィヴィオも『武装色』の覇気』と『見聞色』の覇気』を使いこなせるようになった。『霸王色』の覇気』もだいぶ、制御できるようになった。大したものだな、ヴィヴィオ。」

「うん ありがとう、エース叔父さんにエリオお兄ちゃん」

「エリオ、ティアナもいる？」

「ええ、いますよ。」

「お久しぶりです、なのはさん。」

「うん、久しぶりだね。その格好は？」

ティアナの格好は、”侍”を思わせる甲冑姿だった。

甲冑とはいえ、ティアナの動きを阻害しない程度に調整している。

『クロスミラージュ』は、ハンドガン型から手甲型に外見を変えた。名前も『八咫鳥』に変更した。

「すみません、なのはさんから教わった事を無駄にしてみました…。」

「ううん、ティアナにだって、剣術の師匠がいたからね。ティアナは、そっちの方が似合っているよ。」

「ありがとうございます。」

「エリオ、私達と争うのは止めよう。エリオがいないミッドチルダは、大変な事が起ころうとしているんだ。」

「カイドウさん、ですか。やはり、あの人の事ですから。充分注意はしていましたけど。…ダメですか。…分かりました。その和平に応じます。」

エリオのこの一言で、機動六課VS雷皇海賊団の冷戦状態が終結した。

《機動六課隊舎》

『モビー・ディック号』が、埠頭に着いた。

「坊っちゃん…。」

「坊っちゃんは、もう止めてください。」

「それも、そうだな。良いか、テメエら！今日から、船長の事を”若大将”と呼ぶ事にした。せーの、」

『『若大将、万歳！！』』

エリオは、15歳になった。

いつまでも”坊っちゃん”ではない。

この二年間という期間は、お互いに心身ともに成長した期間なのであった。

『“雷皇”、管理局に屈する。』

『《新時代》の開幕、間近か！？』

など、マスコミでは言っている。

しかし、この和平も”雷皇”の作戦の一部でしかなかったのだ。

(そう言えば、”三大将”の皆さんは、軌道拘置所にいるってティ

「イチさんから聞きました。よく、あの三人を捕まえる事が出来ましたね。しかし……”雷皇”は、こんな所では諦めませんか?」

「総員、ステルスコーティングの準備を、大至急お願いします。」

「えっ!? 何故、そのような事を?」

「……”雷皇”の底力を、本局に見せつけるのです。目標は、聖王教会です。」

「表では、宗教団体。しかし……裏の顔は本局の暗殺部隊の総本部。久しぶりに暴れてやるか、若大将!」

「ヴィヴィオを連れて行きます。それと、機動六課との協力体制を築きます。」

エリオのこの一言に、誰もが驚いた。

〈続く〉

18：和平交渉（後書き）

次回『19：聖王教会襲撃』

ついに、機動六課が管理局と敵対関係になります。

お楽しみに）、（ノシ

EX：ヴィヴィオとティアナの設定

【ヴィヴィオver.】

名前：高町ヴィヴィオ

年齢：9歳

希少技能：『聖王の鎧』・『霸王色』の覇気『

デバイス：コンタクト型デバイス『セイグリッド・ハート』

待機状態は、「vivid」と同じ

補助系デバイス

コンタクトをする事によって、体の硬度を高める事が可能。

要項：

なのはの愛娘。

動物系幻獣種的能力者であり、六式使いでもある。

正体は、古代ベルカに実在した”聖王”のクローン。

《王の資質》と呼ばれる『霸王色』の覇気『の持ち主で、二つ名は”聖王”である。

【覇気使い】でもある。

使用技

・『鉄塊』：肉体の硬度を鉄の甲殻にまで高める。

《派生技》

* ”剛”：最強の鉄塊

* ”砕”：鉄塊状態で突撃

・『紙絵』：敵の攻撃を紙一重で躲す。

・『剃』：瞬発的に加速し消えるように移動する。

・『月歩』：爆発的な脚力で、空を蹴って浮かぶ。

・『剃刀』：鋭い軌道で空を走る。『剃』と『月歩』の複合技。

・『嵐脚』：蹴りで呼び起こす鎌風。

《派生技》

* ”白雷”：上方からの嵐脚。

* ”乱”：嵐脚の乱れ打ち。

* ”凱鳥”：羽を広げた鳥を思わせる大きな嵐脚。破壊力は、抜群。

・『指銃』：指で相手の体を撃ちぬく。

《派生技》

* ”黄蓮”：片手で連射する指銃。

* ”斑”：両手で連射する指銃。

* ”獣敵”：超速で撃ちぬく超重量パンチ。

* 奥義”梟叩き”：”獣敵”を連射する。

・『六王銃』：六式最終奥義。両手で、相手の体に衝撃波を送り込む。

《悪魔の実の種類》

・動物系幻獣種トリトリの実モデル鳳凰「ゴッドバード」

不死鳥とは、似て非なる存在。

青い炎と冷気を纏う事が可能

冷気で、凍らす事が可能（ヒエヒエの実の能力と同じ要領）

青い炎は”再生の炎”とも呼ばれ、再生する事が可能

”海楼石”の効果を受け付けない。

【ティアナVer.】

名前：ティアナ・L・シルバーズ

年齢：18歳

デバイス：インテリジェントデバイス『八咫鳥』

待機状態は、三本足の鳥のイラストのペンダント。

発動時は、手甲になる。

バリアジャケット（BJ）は、「戦国無双2」の明智光秀の甲冑を黒に統一している。

上下袴は、オレンジに統一している。

所持刀：最上大業物”神剣”黒刀『つくよみ月黄泉』

・ミホークが所持する黒刀”夜”以上の切れ味を持つ。

・外見は、「戦国BASARA3」の石田三成が所持する刀に酷似している。

希少技能：『”武装色”の覇気』・『”見聞色”の覇気』

要項：機動六課に所属する新人隊員で、FW陣の指揮官でもある。

肉親は、幼少の頃に亡くす。

親代わりだった管理局員の兄も、不慮の事故で亡くす。

”冥王”レイリーに、義娘として引き取られた。

後見人は、かの”鷹の目”ミホークである

ミホークは、ティアナの才能を見込んで、ティアナに自分の剣術を叩き込んだ。

二つ名は”茜髪”である。

《ランスター流剣術》

- ・ミホークから教わった事を参考にして、ティアナが完成させた。
- ・光速での移動が、主体とした剣術である。
- ・十三手の必殺技を持つ。
- ・体術も使う。

技の詳細

一手：『陽嵐』：黒刀で、火花を散らして納刀する事で爆発する。

二手：『号哭』：光速移動で、前方を薙払う。

三手：『断罪』：居合いと同時に、身を翻して打ち上げる。

四手：『月牙』：強烈な斬撃を飛ばす。

五手：『斬滅』：前方一直線上に強烈な斬撃を放つ。

六手：『刹那』：軌道上の敵全てを斬り裂く瞬速攻撃。

七手：『木犀』：相手の懐に入って、顎を捉えつつ上方へ打ち上げる。

八手：『神鏡』：攻撃を受け流し、瞬速で反撃する。

九手：『贖罪』：身を翻して放つ鎌風。

十手：『慙悔』：瞬速の居合いによって、放たれる数多の斬撃。

十一手：『冥天』：光速での居合い一閃。

十二手：『雷霆』：上方からの光速の刺突。

終十三手：『凶戒』：光速移動をしつつ、滅多斬りにする。

体術

・『彗星』：光速移動。ティアナでしか出来ない。

・『桜吹雪』：ティアナが完成させた至高の幻術。本人曰く「『質量のある』幻術」との事。

・『天駆』：ヴィヴィオから『月歩』を教わり、ティアナ風に改良した歩法。

今更ながら、ヴィヴィオとティアナの詳しい設定項目でした！

読むときは、ぜひ(?) (参考にして下さい) (…)

追加

名前：高町なのは

年齢：22歳

希少技能：『“霸王色”の覇気』

デバイス：インテリジェントデバイス『レイジング・ハート』

待機状態は、原作同様。

発動状態は、原作同様。

バリアジャケットについては、原作同様「エクシードモード」

要項：

機動六課スターズ分隊長で、戦技教導官。

ヴィヴィオの母親であり、『霸王色』の覇気』の持ち主。

『自然系悪魔の実』^{ロギア}の能力者でもある。

《世界を滅ぼす力》【グラグラの実】の“三人目”の能力者でもある。

異名は『管理局の“霸王”』

”火拳” エースの義妹である。

《悪魔の実の種類》

○自然系メラメラの実（炎）

・”炎”人間

・炎をとばす事が可能。

○超人系グラグラの実（地震）

・”地震”人間

・大気を砕く事で、直接震動させ、物理攻撃を防ぐ事が可能。

・衝撃を一点集中させ、相手を直接攻撃する事が可能。

・大気を動かす事で、島・大陸を傾かせる事が可能。

EX02：スバル&キャロvsヴィヴィオ（前書き）

本編の前に暫しの番外編を楽しんで下さいノシ

EX02：スバル&キャロvsヴィヴィオ

ヴィヴィオが、六課に帰ってきて間もない頃。

母であるのはから

「ヴィヴィオ、エースさんから教わった事を見せてくれないかな？」

と、言われた。

《六課・訓練場》

ヴィヴィオが、準備運動をしている。

その格好は、黒で統一したパーカースウェットジャージであった。

スバルとキャロも、バリアジャケットを着て準備をしている。

「よしと。なのはママ〜！始めても、良いよ〜。」

「分かったよ じゃあ、始めるね ルールは、両者のどちらかが負けを認めるまで！レディ、ゴー！」

『ロード…ヒエヒエ』

「アイス塊、両棘矛！」

「……………」

ヴィヴィオは、キャロの攻撃を”目を瞑りながら”避けた。

『見聞色”の覇気”の実力の片鱗だ。』

”気配”を感じる能力を増幅させ、相手の人数や場所を察知する。

一番の特徴は、相手の攻撃を先読みする事が出来る。

「!?!?…アイス塊、暴雉嘴!」

「…『剃刀』」

空を鋭い軌道で走る。

「ゴムゴムの〜!」

「……………」

「『銃弾! / 『鉄塊』』」

スバルのラッシュを受け止めるヴィヴィオ。

「『嵐脚』」

ヴィヴィオの鎌風が炸裂する。

「わあー!」

スバルは、すかさず躲した。

(なんか、ヴィヴィオ。全然、雰囲気が違うよ。キャロ、どうする?)

(そう、ですね。とりあえず、私が誘き寄せますから。その後は、よろしく頼みます。)

(うん!)

『ロード：マグマグ』

「冥狗!」

キャロの右手を犬の爪に変化させた。

しかし、

「『指銃』 獣敵』」

「……えっ?」

キャロの脇腹に、ヴィヴィオが超重量パンチが入った。

「ど、どうして、私の”実体”に触れる事が出来たの?」

「……『武装色』の覇気』だよ。その覇気を纏う事で、悪魔の実の能力を無効に出来るの。自然系能力者の”実体”にも触れる事が出来たの。」

「そ、そんな……。」

キャラは、ヴィヴィオにもたれつつ気絶した。

「きゃ、キャラ?!」

「次は、スバルさんの番だよ?」

「…ギア、2nd!ヴィヴィオ、本気で行くからね!」

「うん。」

「ゴムゴムの〜。」

「遅いよ、スバルさん。」

「えっ……………?い、いつの間に、う…後ろ?」

「『指銃』黄蓮」

連射して、スバルの体を撃ちぬく。

「がはっ!」

スバルの膝が、地面に付いた。

「それが、スバルさんの本気、ですか?」

ヴィヴィオは、スバルに”覇気”を込めながら言った。

「うっ!?!」

「本気じゃないから、私の本気を見せてあげる。」

そう言つてヴィヴィオは、両手をスバルの胸に当てた。

「六式最終奥義、『六王銃』！」

スバルの胸に衝撃波を送り込んだ。

「がはっ！」

スバルの口から、大量の血飛沫が舞う。

「私はひたすら、なのはママを助けたかった。それだけの思いで、ここまで強くなった。スバルさん達とは、全く違います。」

ヴィヴィオは、立ち去ろうとしたが

「……ち、違わないよ？」

「!?!」

スバルが、辛うじて立ち上がった。

「私だって、強く、なりたい、理由があるんだよ？なのはさん、みたいに他人を助け、たいから。」

「……お気持ちは、良く分かりました。ですが、そんな体では、誰も”救う事なんて、出来ません!”」

ヴィヴィオは、スバルを威圧した。

スバルは、口から泡を吹きながら気絶した。

《王の資質》とも呼ばれる『霸王色』の覇気』の真骨頂だ。

《六課・部隊長室》

「ヴィヴィオ、まさかあんなに、強かったとはな。どうなんや、なのはちゃん？」

「…うん。でも、エースさんとエリオが鍛えてくれた成果だったら、文句なしだよ」

「フェイトちゃんは？」

「…ダメだね。ヴィヴィオに説得しようがないね。」

「そうやな。ヴィヴィオは、なのはちゃんのために強くなったからな。」

なのは達3人からは、なかなかの好評価だった。

「次は、ティアナ、やな。…あれから、どう成長したやるか。楽しみやな！」

「…うん！」

しかし…ティアナの模擬戦の結果を見た3人は、驚愕した。

何しろ、ティアナがシグナムに圧勝したからだ。

〈続く〉

19：聖王教会襲撃（前書き）

『聖王教会』 本局直属暗殺部隊の本部』

という確信する情報を提供された機動六課。

彼女たちは、一体どんな身の振り方をするのか。

19：聖王教会襲撃

《六課・部隊長室》

エリオは、はやて達に『聖王教会』の秘密を話すべきか迷っている。何しろ、『聖王教会』は機動六課の後見人がいるからである。

(困ったな…。でも、一応話しておくか。)

・
・
・

「どういう事なんや？『聖王教会』が、本局直属暗殺部隊の本部？」

「そのままの意味です。『聖王教会』の表は、れっきとした宗教団体です。しかし、裏は本局直属の暗殺部隊の本部という顔を持っています。」

「エース兄さんからは、聞いた事があつたけど…。なんか、残念だね。」

「なのはさん…。なのはさんの”事故”もまた、『聖王教会』の企みの一種です。」

「……なんか、『聖王教会』って意地汚いね。エリオ？」

「はい！（また、「お話」されるかな？）」

「『聖王教会』を潰そう？」

「『えっ……。』」

なのはの一言で、雰囲気は激変した。

「さっきからずっと、考えていた。でも……万が一、ヴィヴィオに何かあったら……。そう考えてしまうよね。」

「『なのは(ちゃん)……。』」

「八神部隊長。僕達、『雷皇海賊団』と一緒に『聖王教会』を潰しませんか？」

「……もちろんや！なのはちゃんの件を裏で糸を引いていたんや。絶対に許さへん！エリオ、協力するで！」

「ありがとうございます、八神部隊長。」

「ええんや。エリオは、れっきとした”六課のFW”のメンバーやからな。」

《六課・訓練場》

様子が慌ただしい。

無理もない。

ヴィータ率いる『鉄鎚海賊団』が、全員集合したからである。

「ティアナ。お前の活躍ぶりを船長より、聞かせてもらった。」

「はい。」

「……なかなかのものだ。さすが、この”鷹の目”の唯一の弟子だからな。」

「光栄です、師匠！」

「ミホーク、ティアナ。悪いが、話は後にしてくれ。」

「何か、あったのですか？」

「近頃、『聖王教会』を襲撃する。」

「……やはり、そうになりましたか。」

「えっ？ どういう事、ティアナ？」

スバルの反応に、思わずため息をつくティアナ。

「……ふう〜。簡単に言うとな、『聖王教会』は、本局直属の暗殺部隊の本部にもなっているのよ。」

「そんな〜！ だって、『聖王教会』って私達の後見人でしょう！」

「八神部隊長とエリオが、話し合って決めたそうよ。」

「……………」

・
・
・

「久しぶりだな、高町なのは。」

「お久しぶりですね、Mr・クロコダイル。そして、”海侠”ジンベエさん。」

「”管理局の霸王”は、相変わらずの健在だな。」

「いえいえ、とんでもない。少しばかり無茶してきましたから。」

「高町のお嬢ちゃん。あんまり無茶をなさるな。」

「はい。ジンベエさんには、いろいろお世話になりましたから。」

「なに。お嬢ちゃんは、エースさんの義妹だからな。僕にとっても、守るべき存在でもある。」

「ジンベエさん……………」

「そう言えば、『聖王教会』を襲撃するって話を聞いたが。」

「ええ……………。六課と”雷皇”の共同戦線で、潰します。」

「ついでに俺達は、この六課隊舎の防衛。ヴィータ船長からの命令だからな。」

「あなた方にとって、ヴィータちゃんはどんな存在なんですか？」

「…偉大な船長だ。なおかつ、包容力と人を惹き付けるカリスマ性を兼ね備えている。あの”白ひげ”から『宿敵であり、最高の戦友』と言わしめたからな。」

「へえ〜。」

「”雷皇”の若大将もそうじゃ。」

「エリオも、ですか？」

「”雷皇”の若大将も”白ひげ”のオヤジさんや女将と同じく、包容力を持ち、人を惹き付けるカリスマ性を兼ね備えている。」

「なるほど〜！」

「MS・高町、久しぶりに、腕試しでもするか？」

「結構です。実戦まで、温存しておきたいから。」

「それも、そうだな。」

（翌日）

いよいよ、『聖王教会』襲撃を決行する時。

エリオは、一足早く『モビー・ディック号』に向かった。

六課の面々は、アースラに乗り込んだ。

「八神部隊長。」

「なんや、エリオ。」

「スバルさんとキャロに、足を引っ張らないように言っておいてください。」

「分かつとるよ。」

「まずは、僕達が教会騎士団を惹き付けます。その隙を突いて、なのはさん達が教会内部に潜入して下さい。」

「了解や。エリオ、無茶しちやいかんよ？フエイトちゃんが、心配するから。」

「重々承知していますよ。」

《聖王教会》

二隻の船が、浮上している。

一隻は『モビー・ディック号』

もう一隻は管理局の船で『アースラ』という。

「あの船って…まさか!？」

「騎士カリム!機動六課の皆さんが、あの船に!」

「分かっているわ!はやて…どうして?」

・
・
・

「雷皇”に屈してはならぬ!我々には、『聖王』がついている。」

「そつだ!海賊なんか屈してはならない!応戦しろ!」

「やれやれ。こう簡単に舐められるのかよい。」

「良いじゃないですか、マルコさん。そのうち、後悔しますから。」

「それも、そつだよい。」

「エリオ!」

「エースさん、どうかしましたか?」

「ヴィヴィオをどうする?」

「なのはさんに任せていますよ。」

〈六課Side〉

「 ” 霸王” だ！討ち取れ！」

「 キリがないね。 ” 火嵐” 」

炎の竜巻を起こす。

「 これじゃ、全然進まないよ。 」

「 ” 霸王” なんかに、屈してはならない！」

「 騎士カリムに、近付けるな！」

「 邪魔をしないで、なの！” 鏡火炎” ！」

「 なのはママ。こっちも終わったよ。 」

「 そう： ヴィヴィオ、大丈夫？」

「 うん！この2年間、ずっと野生動物を相手にしていたから。 」

「 改めて、エリオとエース兄さんに感謝しないとね。 」

「 そうだね。 」

（ エリオside ）

「 ……………。 」

船首から戦場を眺めるエリオ。

その隣には、ティーチとスカリエツティの姿があった。

「若大将、どうかしましたか？」

「教会騎士団の動きが、なんかおかしい。」

「ゼハハ！もしかしたら、本局の援軍を待っているかもな！」

「なるほど、それも一理ありますね。よし、全隊長に告げる！なるべく、応戦しながら後退して下さい。」

・
・
・

エリオの指示で、マルコ達が後退する。

「厄介な事に、なったよい。エースの義妹と姪っ子は、大丈夫かよい。」

「心配するな、マルコ。あの子は、エース以上に強いからな。」

「ジョズ…余計なお世話だよい。」

（六課 side）

なのはとヴィヴィオは、カリムの執務室にいた。

「高町一尉！これはどういうことですか？」

「騎士カリム、これはヴィヴィオのためなんです。ヴィヴィオの正体が本局に、知られてしまう事が私にとって一番、怖いです。」

「ならば、聖王教会で預かるといふ手段もあります！」

「いいえ。あなた方は、本局直属の暗殺部隊。そのような所に、娘を…ヴィヴィオを預ける訳にはいきません。」

「…見損ないました！」

「それは、お互い様ですよ？」

「高町一尉！私が、目を覚ましてあげます。」

「シスターシャツハ…。ヴィヴィオ、危ないから少し下がってて。」

「なのはママ…。」

ヴィヴィオが少し、涙目になりながらなのはを見つめる。

「大丈夫…。なのはママは、無茶しないから、ね？」

「本当に？」

「うん！それと、エース兄さんが来るからね。」

「叔父さんが？」

「だから、エース兄さんが来たら…ヴィヴィオ、兄さんのそばにい

て。」

「分かった！」

なのはは、愛娘を抱き締めた。

「気を付けてね、なのはママ……。」「

「うん、ヴィヴィオのためにも負けられないよ！」

そう言って、立ち上がった。

「さあ、シスターシャツハ。たつぷりと、”殺し”合いましょう。」

「っ！」疾風一迅”」

シャツハは、神速の攻撃を繰り出した。

なのはは、それを素手で受け止めた。

「なっ！？」

「そんな程度ですか？”火龍”！」

火の龍を繰り出した。

「くっ！」

「”炎戒”、”火柱”！」

さらに、上方から火柱を繰り出した。

「エリオside」

「若大将！上空から本局の軍艦が！」

「構いません！”雷皇”の恐ろしさを、叩き込むまでです！」

「そんな事は、させぬ！」

「きよ、巨人族か?!」

「隙を見せたな、”雷皇”！覚悟しろ！」

巨人族の男が、エリオに向けて斧を振り降ろす。

「……………」

エリオは、左手で大気を砕きながら止めた。

「くっ！さすが、”白ひげ”の後継者だな！」

「……………」

再度、大気を砕く。

男の斧が、ものの見事に大破した。

「はあああ〜！」

エリオは、男の腕を掴み船首に叩きつけた。

「なっ!?!」

男の頭に、”地震”の衝撃を一点集中させた。

「ふん!」

衝撃を放った。

男は、”地震”の衝撃を直接食らったため、気絶した。

エリオは、気絶した男を投げ飛ばした。

『アレックス少将!』

「そんな!?!巨人族が、ましてや武装隊の少将が一捻り!」

「……………」

エリオは、戦場を眺める。

そして、

「頃合いです!総員、聖王教会に向けて、突撃!」

『ウオオ〜!』

エリオの合図で、”雷皇”の隊長達が突撃を仕掛ける!

〜六課side〜

なのはとシャツハの戦闘に戻るとしよう。

「大変です、騎士カリム！」

「どうかしましたか？」

「“雷皇”の隊長達が、こちらに向かって来ます！早く、避難なさ
つて下さい！」

「でも、シャツハが！？」

「：“疾風一迅”！」

「“鏡火炎”！」

2人のバトルは、激しさを増すばかりだ。

「はあああ〜！」

シャツハが、なのはを肉薄にしていく。

「ろくに、“霸気”が使いこなせないのに…。”火嵐”！」

「きゃあああ〜！」

ドォーン！

そんな音を立てながら、シャツハは地面に叩き落とされた。

「残念です、シスターシャツハ。貴女が、”こんな”程度だったとは…。行こう、ヴィヴィオ。」

「はい！」

（エリオside）

「若大将！六課から、撤退要請が来ていますが…。」

「……六課の皆さんは、そのまま撤退させてください。」

「了解！」

その後、はやてが反対したが、エリオの

「僕達は”海賊”です。これ以上、フェイトさん達に迷惑かけたくありませんから。」

という内情を知ったはやて達は、大人しく撤退した。

『“雷皇”、聖王教会を襲撃！？』

『聖王教会Ⅱ暗殺部隊本部。新事実発覚！』

ミッドチルダ全土に衝撃が走った。

《ミッドチルダ湾岸》

ポセイドン号が、漂っている。

船首で、ヴィータが真つ昼間なのに、酒を飲んでいる。

「さて、”新時代”への開幕と行くか！野郎共、出航の準備をしろ！目標は、軌道拘置所！”三大将”の救出に向かうぞ！」

『ウオオ〜！女将と共に、行くぞ！』

「ンフフフフ…。妙に、張り切りやがって。」

「じゃが…。軌道拘置所は、守りが堅い。どうするなんじゃ、女将は？」

「ンフフフフ…。ジンベエ、俺達は誰だと思っている。『王下七武海』だ。」

「まあ、そうじゃな。」

「ジンベエ、船を舵をしっかりと取れよ！」

「了解しましたぞ、女将！」

こうして、『四皇』”紅き鉄鎚”ヴィータ…かつて”白ひげ”と肩を並べた怪物が、動き出した。

（続く）

19・聖王教会襲撃（後書き）

『20・四皇”紅き鉄鎧”…”白ひげ”と肩を並べた伝説の女海賊』

お楽しみに〜ノシ

20・四皇"紅き鉄鎚"・白ひげ"

『世界最強の女海賊』が動き出した！

その時、六課隊舎では…。

〈回想・ヴイタside〉

あたしは、はやてと会う前にG・ロジャーとかいう奴に会った。

あいつは、なかなか面白い奴だった。

あたしは、ロジャーの船に乗って一緒に冒険に出た。

クルーの皆は、かなり個性的な奴だらけだったな。

レイリー、バギー、シャンクスetc…。

今となつては、懐かしい連中だらけだった。

冒険には、闘いがつきものだ。

”白ひげ” エドワード・ニューゲート

”金獅子” シキ

”英雄” ガープ

『智将』” 仏” センゴク

懐かしすぎるぜ…。

22年前、ロジャーが”海賊王”と呼ばれた。

あたしは”紅き鉄鎚”と呼ばれるようになった。

あたしが、唯一認められた戦友は”白ひげ”だった。

あの野郎だけ、あたしを戦友と認めてくれた。

ロジャーが、処刑されてからは《鉄鎚海賊団》の船長として、海賊を続けた。

今じゃ、『四皇』としてかなりの有名人になった。

（回想・終）

《ミッドチルダ湾岸》

鉄鎚海賊団の船『ポセイドン号』が漂っている。

船首には、いつもの騎士甲冑とは違う騎士甲冑を纏っているヴィータがいる。

武装隊のアンダースーツを参照。

「女将さん！軌道拘置所まで、もう少しですよー！」

「そうか…。オメエら、準備が出来たか？」

『オオオー！』

「さて、派手に暴れてやろうか！」

《地上本部》

「申し上げます！軌道拘置所にて、かの”紅き鉄鎚”の姿が！」

「なんだと?!気を付ける!”紅き鉄鎚”は”白ひげ”と肩を並べた伝説の怪物だぞ！」

「了解！」

・
・
・

《軌道拘置所》

「”紅き鉄鎚”だ！」

「気を付ける！」

「ソフフフフ。無駄な事だぜ！」

「さて！たつぷりと暴れてやろうか！」

「あつ、あれは?!”傀儡師”と”海侠”だ！」

「他にもいるぞ!”鷹の目”に、”暴君”、”砂塵”も！」

「気を引き締めろ!”白ひげ”と肩を並べる怪物だぞ！」

「クロコダイル、お前の砂嵐で蹴散らせ。」

「……無論だ、女将。”砂嵐”！」

クロコダイルが、砂嵐を起こす。

「クツハハ。俺達の邪魔はさせんぞ。」

「やるな、クロコダイル。…ジンベエ！」

「了解しましたぞ、女将！行くぞ、お前たち！」

『ウオオ〜〜！』

「”海侠”が暴れ出すぞ！」

《六課隊舎》

皆、テレビに夢中だった。

何しろ、『四皇』の一人、”紅き鉄鎚”ヴィータの実力が見られる
数少ないチャンスだから。

「これが、かの”白ひげ”と肩を並べたという、ヴィータの実力か。」

シグナムが、そう呟く。

「まだ、そんなものじゃねえ。」

「父さん!？」

スバルが、大声を出した。

食堂に姿を現したのは、スバルの父”銀狼”ゲンヤだ。

いつもの制服に、『正義』の一字を刺繍されているコートを羽織っている。

「あの嬢ちゃんの底力は、こんな程度じゃねえぞ。よく、見ておけよ。」

ゲンヤは、そう言いながらテレビを見つめた。

《軌道拘置所》

ポセイドン号の船首からヴィータが、戦場を眺めている。

「隙を見せたな、”紅き鉄鎚”！」

仮面を被った軍服の巨人族の男：ロンズ中將が、斧をヴィータに向かって振り降ろす。

「見え見えなんだよ、ロンズ。」

左手一本で、止めた。

しかも、大気を砕いて。

「くっ！」

「もう一丁、と。」

再度、大気を砕く。

斧が、大破した。

すかさず、ヴィータが、ロンズの腕を掴み、船首に叩きつけた。

「し、しまったー!!」

「じゃあゝな、ロンズ。ふん！」

「ぐわあゝ！」

ロンズの断末魔が響いた。

”地震”の衝撃を真正面から受けたからである。

「邪魔だな、ほらよ。」

気絶したロンズを投げ飛ばす。

『ろ、ロンズ中将?!』

《六課隊舎》

『……………』

六課の皆が、啞然とする。

「やはり、ヴィータ副隊長は強いですね。」

エリオがさりげなく、呟く。

「甘いな、”雷皇”の坊主。”紅き鉄鎚”の底力の1割も出してねえぞ。」

ゲンヤもさりげなく、呟くのだった。

《軌道拘置所》

「おい、見る！」

「きよ、巨人族が！それに、武装隊の中将を一捻りで！」

「臆するな、奴は”白ひげ”と同じ世代だ！衰えていく老兵だ！」

「……………くま。」

「なんだ、船長。」

「…殺れ。」

ヴィータの怒気交じる声が響く。

「承知した。」

くまは、両手を大空を向かって広げた。

そつ…空気を”弾いて”いるのだ。

圧縮した空気の球を、放出する。

ウルスス・シヨック
「熊の衝撃」

くまが、眩く。

すると、圧縮された空気が解放して、爆発した。

《六課隊舎》

『……………』

「あの人って、かなり強いよね…。」

「それは、そうですね。伊達に”暴君”って呼ばれているのよ？」

「ゲンヤさん。まだこれから、ですよね？」

「そろそろ、”鷹の目”が動くときだな。」

「師匠…………。」

《軌道拘置所》

「……ミホーク。はやて達に見せてやれ。お前が放つ『世界一の斬撃』をな。」

「……無論。」

ミホークは背中から、黒刀”夜”を抜いた。

「た、”鷹の目”だ！」

「『世界最強の大剣豪』が暴れるぞ！」

「……………」

黒刀を振り降ろす。

すると、シグナムの『紫電一閃』の数倍以上の斬撃が放たれる。

《六課隊舎》

「なっ！私以上の斬撃をいとも簡単に放つとは！」

「あれが、”鷹の目”の剣術の真髄だな。」

「それより、父さん。その格好は？」

「これはな……………」

「『正義』の名の元で、海を守る海軍将校のコートだ。」

『れ、レジアス中将?!』

管理局地上本部首都防衛隊代表、レジアス・ゲイズ中將が六課隊舎に現れた。

しかも、ゲンヤと同じコートを羽織っている。

「レジアス…。」

「懐かしいですな、ゲンヤさん。あの頃は、”白ひげ”や”金獅子”などの大海賊が暴れていた時代でしたからな。」

「ああ、懐かしい。俺なんか、ガープと並んで『海軍の二大英雄』なんて呼ばれていたな。」

「ええ、『白ひげ』を追い詰めた伝説の海兵』として後世に語り継がれています。」

「”銀狼”も、その時に呼ばれるようになったな。」

「こうして、彼女の底力を思い知る事によって、本局は迂闊な行動が出来ないでしょう。」

「まあ、本当の狙いは『三大将』の救出だろうけどな。」

「本局、聖王教会の連中は『三大将』の恐ろしさが分かっていないのだ！」

「『三大将』は、”海軍最高戦力”だからな。」

「そうです！あつ、ゲンヤさん！」紅き鉄鎚”が動き始めますよ。」

《軌道拘置所》

「見せてやるよ、”白ひげ”と肩を並べたあたしの底力をな。」

ヴィータは、体を屈めた。

そして、両の拳で大気を砕いた。

すると、ヴィータの左右の海上の様子が激変した。

水面がものすごい勢いで上昇してきた。

そう……”海震”である。

「女将の恐ろしさをよく叩き込んでおくのじゃ。」

「おい、”海震”が起きたら……まさか……。あつ、あれは？！」

『つ、津波だ〜！』

「これが、『”白ひげ”と肩を並べた伝説の海賊』と謳われた女海賊、”紅き鉄鎚”ヴィータの実力か！」

「アイズ・エイジ”氷河時代”！」

「……青キジか。」

「女将、助けに来るのが遅いですよ。」

「それは、悪かったな。」

「”大噴火”！」

マグマの拳で、氷の壁を蒸発させた。

「赤犬か。」

「女将、感謝する。やはり、管理局は儂らが改革する必要があるよ
うじゃのう。」

「…黄猿。ばれているぞ、あたしの後ろにいるな。」

「あれれ？わっしって、分かりやすかったのかねえ。」

「黄猿、暢気な事を言っな。」

「分かっていますよ、女将。…”八咫瓊勾玉”」

黄猿が放つ光の弾が軌道拘置所を破壊していく。

「さて、わっしらも行動開始とするかねえ。」

《六課隊舎》

「お久しぶりです、サカズキ大将！」

「ん？おお、レジアスカ。久しいのう。」

「はっ！」

「ゲンヤさんもいたのか。」

「…まあな。」

「みんなも、久しぶりだねえ。特に、”雷皇”と”茜髪”の二人は。」

「……………」

「以前とは、ガラリと変わったな。それと…。」

「？」

青キジは、ヴィヴィオを抱き上げた。

「ずいぶん、大きくなったな。”聖王”ヴィヴィオちゃんよ。」

「お久しぶりです、青キジさん。」

「お嬢ちゃん、そんなに”覇気”を剥き出しにしないでなくても良からう。僕らは、お前さんの後見人じゃ。」

「あはは……。ごめんなさい、赤犬さん。」

「まあ、気にしちゃおらんがな。」

「ヴィータ副隊長！」

「なんだ、スバル？あたしに個別指導でもして欲しいか？」

「はい！ヴィヴィオやエリオ、なのはさん、ティア、ヴィータ副隊長が使う『霸王色』の覇氣』を教えてもらいたいです！」

「『！！！？？？』」

三大将が、スバルに注目した。

「何のためだ、スバル？」

「強くなりたいたい！それだけです！でないと…。」

「甘ったれた事を言うじゃねえぞ、スバル！」

「えっ？」

「良いか、スバル！あたし達はな『海賊』なんだ！！それに、お前みてえな乳臭い奴が簡単に使う事が出来ねえんだ！分かったか、スバル！少しは、頭を冷やしておけ！」

ヴィータの怒気交えた声と”覇氣”を込めた顔をスバルに向けた。

スバルは、泡を吹き出しながら倒れた。

「それに、『霸王色』の覇気』は一種の希少技能レアスキルだからな。シャル、スバルを頼むぞ。」

「ヴィータちゃん…。」

・
・
・

ヴィータは、隊舎近くに建てた墓陵にいた。

それには、『大海賊』白ひげ』、ここに眠る。』と書かれていた。

「よっ、」白ひげ』：また、来てやったぞ。お前が死んで、ちょうど10年になるな。ほら、お前が大好きな酒だ。」

ヴィータは、亡き宿敵であり、戦友でもある』白ひげ』の墓陵に酒を置いた。

「白ひげ」。お前とあたしが出会ったのは、もう…そうだな。30年以上も前になるか。」

〈回想・ヴィータside〉

ロジャーの船で、あたしは特攻隊長をやっていたな。

「ヴィータ！あいつが」白ひげ」だ、覚えておけよ！」

「ああ…。」

ロジャーからの忠告を聞いて、お前を睨み付けただったか。

「あいつが”白ひげ”か。覚えておけ！てめえの首は、あたしが貰うからな！」

それから、何度もお前と殺し合ったな。

なかなか決着がつかないまま、ロジャーは『海賊王』として名を残した。

ロジャーが死んでから、あたしは『鉄鎚海賊団』を率いて海賊を続けた。

でも一時期、海賊を辞めたけどな。

それが、はやての元で守護騎士をした時だ。

まさか…なのはが”火拳”エースの義妹で、フェイトがロジャーの娘だった。

そりゃ、驚いたさ。

だが、あたしは手加減する事がなかった。

『ロジャー海賊団』の伝説の船員クルーの一人として、闘いの恐ろしさを分からせるためだった。

〈回想・終〉

《六課隊舎》

「ヴィータ……。ええ子やな。」

「副隊長、ずっと一人で『海賊王』G・ロジャー』の名を守ろうとしたんだ。」

「ヴィータ……。お前もずいぶん苦労したな。」

食堂では、ヴィータの壮絶な過去を知ってしまった六課の隊員達が号泣する光景が見られた。

「ヴィータ…私の事を守ろうとしてくれたんだ。」

フェイトは、ヴィータに対する恩義を作ってしまった事を後悔して、大号泣をした。

〜翌日〜

『おはようございます、ヴィータ副隊長!』

「おお、おはよう。オメエら、妙に元気じゃねえか。よし、今日も鍛えてやるからな!」

『はい!』

六課の絆が、一段と深まった出来事だった。

〜続く〜

お久しぶりです！

暫く、皆さんに会う事がありませんでした！

実は、先週に大学の推薦入学試験がありまして、それに集中したかったのが理由です。

本当にごめんなさい！

この話では、ヴィータの悲しく切ない過去に触れています。

今後も、このような話を書く時もあります。

ご了承ください。

今回は『21：スバルの猛特訓の日々』です！

お楽しみに〜ノシ

21：スバルの猛特訓の日々（前書き）

スバルは、自分が目指した『強さ』を見直すべくヴィヴィオに弟子入りしたが、ヴィヴィオの推薦で、“ある人”がスバルを鍛える事になった。

21：スバルの猛特訓の日々

（スバルside）

私はずっと、『困っている人を助けたい！』、『誰かを守りたい！』を信条に、頑張ってきた。

でも、ヴィヴィオやヴィータ副隊長に

『そんな甘い考え方じゃ、強くなんかなれない！』

って言われた。

悔しい…ただ、それだけだった。

でも、ヴィヴィオやヴィータ副隊長の言う通りだね。

守りたいものがあるなら、敵を躊躇なく倒さないといけない精神力が必要だった。

”今”の私には、そんな精神力がない。

だから、ヴィヴィオやヴィータ副隊長の元で強くなりたい！

（side・out）

《六課・訓練場》

「本当に強くなりたいですか、スバルさん？」

「うん！ヴィヴィオやヴィータ副隊長のおかげで、『強さ』の意味が分かったよ！」

「……合格ですよ。」

「本当に?!」

「はい、合格です。」

「やったあ〜！」

「この、馬鹿スバル！」

ティアナに、いつものように叱られるスバルだった。

・
・
・

「では、これから『よく分かる”覇気”講座』を開講したいと思います。」

「ねえ、ヴィヴィオ。”覇気”って、どんなものがあるの？」

「”覇気”には、3つあります。『見聞色”の覇気』、『武装色”の覇気』、そして…私やなのはママ、エリオ兄さん、副隊長が持っている『”霸王色”の覇気』があります。」

「詳しく教えて、ヴィヴィオ。」

「まず、『見聞色』の覇気』です。簡単に言いますと、『あらゆる気配を感じる能力を増幅させる。』…それが、最大の特徴です。」

「例えば、相手が何処にいるとか分かってしまうの？」

「そうですね。それと、相手の攻撃を先読みする事が出来ます。」

「『武装色』の覇気』って、キャロを倒したときに使ったあれの事？」

「うん。その覇気を纏う事で、攻撃力を増幅させる事が出来ます。そして…悪魔の実の能力を無効に出来ます。流動する自然系能力者の実体を触れる事も出来ますよ。」

「最後に、『霸王色』の覇気』って？」

「この覇気は、10万人に一人ぐらいしか、持っていない覇気です。別名《王の資質》とも言われていますよ。簡単に言いますと、自分より実力が弱い相手に覇気をぶつけるだけで、ひれ伏させる事が出来ます。スバルさんにも、この覇気の資質がありますよ？ですが、まだ目覚めていないようです。」

ヴィヴィオは、スバルに長々と説明した。

「そんなに、少ないの?!それが、私にもあったの?!気付かなかつたよ。」

「以上で、私からの簡単な説明を終えます。」

「ありがとう、ヴィヴィオ　ねえ、ヴィヴィオが強くしてくれるの？」

「いいえ。スバルさんには、”ある人”の教導を受けてもらいますね。すみません！ちょっとだけ、こっちにに来てもらえませんか？」

「あつ、あなたは…ティアのお義父さん！？」

そう…ヴィヴィオが言う”ある人”とは、ティアナの義父で、元口ジャ―海賊団副船長”冥王”シルバ―ズ・レイリー、その人である。

「久しぶりだね、スバルくん。元気そうで何よりだ！」

「あつ、はい！あの、ご教授、よろしくお願いします！」

「うむ。君を、立派な格闘家にしてあげよう。私の訓練に、耐えていく自信はあるかね？」

「はい！私は、そのためにこの場所にいます！」

「そうか…ティアナと言い、君も頼もしいな。よし、良いだろう。」

「よろしくお願いします！」

こうして、スバルの猛特訓が始まった。

毎日朝早くから、夜遅くまでの猛特訓だった。

ひたすら、” 覇気 ” を使いこなせるように、レイリーに鍛えられた。そして…自分の戦闘スタイルも見直した。

デバイスやバリアジャケットも、新しく改造してもらった。

そうこうしていると、あっという間に一年半が過ぎてしまった。

クラナガンの繁華街で、指名手配されている強盗団が出現したとの知らせが機動六課に入ったのだ。

六課からスバルが、現場に向かった。

《クラナガン・繁華街》

「あっ、ギン姉！」

既に、陸士部隊の魔導師が現場にいた。

スバルの姉、ギンガもいた。

「スバル、遅い！…って何か、遅くなったね」

「ありがとう、ギン姉」

ギンガが驚くのも、無理ないだろう。

以前の乳臭い雰囲気はなくなった。

デバイスは、黒を基調とした手甲『レイジング・ナックル』（不屈の

拳)』である。

バリアジャケットは、青を基調とした上下のパーカースウェットジヤージだ。

いかにも、『ストリートファイター』にも見える。

「それでギン姉、今の状況は？」

「犯人は、人質を取って立て籠もっているわ。しかも犯人は、質量兵器を不法所持しているわ！」

「分かった。ギン姉、私が行ってくるよ」

「止めなさい、スバル！相手が誰か分かっているの？」

「うん、分かっているよ。でも、いつまでこんな状況じゃ人質が危ないよ？だから、私が直接、犯人に交渉しに行くね」

「分かった…。けど、気をつけてね」

「うん！」

「……………」

スバルは、フードをさりげなく被って歩いていく。

「そこのお嬢さん、待ちな。」

「…なにか？」

「俺の名を知っているだろうか？」

「最近、ミッドチルダで話題となっている盗賊団『黒蟻団』首領、
”殺人蟻”ベルモット、ですよね？」

「その通りだ、お嬢さん！まさか…賞金稼ぎでは、ないだろうか？」

スバルは、フードを外しながら

「いいえ。私は、時空管理局遺失物管理部第六課…通称『機動六課』
所属、スバル・ナカジマです。」

「『機動六課』って、『聖王教会』を襲撃した奴等じゃねえか！？
まさか、あの連中の一人に出会うとはな。」

「へえ〜。私達を知っていましたか。」

「ああ、管理局を敵対している奴等がいるって聞いたからな。必死
になって調べたさ。さて、お嬢さんの首でも、貰うとするか。」

”殺人蟻”ベルモット…懸賞金2億5000万ミッドドルの大物で、
動物系ムシムシの実モデルアント「蟻」の能力者でもある。

「俺の猛毒でも、食らいな！」

ベルモットからの攻撃が、スバルを襲う。

「遅いよ。」

スバルは、頭を少し右へ傾けただけで、躲した。

「な、なんだと！？俺の攻撃が、先読みされたでも言っつのか？！」

「ギア：2nd。」

左手から凄まじい量の蒸気が出てきた。

「まさか、お前も能力者なのか！？」

「ゴムゴムの〜。」

既にスバルは、ベルモットの頭上にいた。

「なっ！？」

「は、速い！？動きが見えなかった！」

姉のギンガも、スバルを追い付く事が出来なかった。

「JET、銃！」
ピストル

”覇気”を纏う一撃で、2億の大物を仕留めた。

この活躍によって、スバルの異名は『剛拳』と呼ばれるように

なつた。

《六課隊舎》

「義父さん、スバルは、私以上の大物になったかもしれないね」

「どうやら、そのようだな。」

「やれやれ、レイリー。お前の猛特訓は恐ろしいな。あたしも驚いたぞ。」

「グイータまで……。やれやれ、困ったものだな。」

「全くですよ、義父さん。でも、ありがとう。スバルを鍛えてくれて。」

「あたしからも、礼を言うぞ。すまねえ、レイリー。」

「礼には、及ばないよ。では、またな。ティアナ、元気だな。」

「またね、義父さん。」

「ああ、レイリー。お前も、元気でいろよな。」

自慢の愛娘と親友に見送られ、”冥王”は繁華街へと消えた。

（続く）

21：スバルの猛特訓の日々（後書き）

わずか1日での投入は、久しぶりですね。

これは、きつい（・・・）

次回は『22：Numbers』

お楽しみに〜ノシ

EX03：スバルの設定

名前：スバル・ナカジマ

年齢：17歳

希少技能：『“霸王色”の覇気』

デバイス：手甲型インテリジェントデバイス『レイジング・ナックル（不屈の拳）』

外見イメージは『戦国BASARA3』の徳川家康の初期武器の手甲で、それを黒に統一したver.

待機状態は、原作と同様である。

バリアジャケットは、青を基調としたパークースウェットジャージ上下で、背中には「虎の刺繍」がされている。

バリアジャケットについて、六課のメカニック担当のシャリー曰く「これって、バリアジャケットになるかな？」との事だ。

要項：六課所属のFWメンバーで、切り込み隊長でもある。

以前、“拳聖王”ヴィヴィオに、倒されてしまった。

その出来事をきっかけに、“冥王”レイリーの猛特訓を受けた。

そのおかげで、『霸王色』の覇気』を目覚めた。

以前とは、纏う空気が明らかに違っている。

異名は『剛拳』と呼ばれている。

悪魔の実の能力者でもある。

スバルの知られざる正体は『戦闘機人type・2nd』である。

《悪魔の実の種類》

・超人系ゴムゴムの実

”ゴム”人間

打撃、銃弾、雷が無効になる。

伸びる長さには、限界がある。

内臓の器官や血管もゴムになっている。

作者からのお知らせ

本作品を読んで下さった皆さん！

本当にありがとうございます！

本作品がここまで、読者の皆さんに、読まれている事を心から感謝申し上げます！

閑話休題

そんな読者の皆さんに、感謝の意を表して、リクエストを募集したいと思います！

もし、リクエストがある方が、いらっしやるなら、「感想を書く」にて、リクエストをしてください！

これからも、頑張っていくきます。

今後とも『『三大将』のミッドチルダ漂流記』をよろしく願います
m () () m

22:Numbers part A (前書き)

新たな”敵”が、着実に動き始めてきた。

22:Numbers part A

《ミッド湾岸》

『モビー・ディック号』の船内では、エリオとドゥーエが仲良く寄り添っていた。

「ドゥーエさん、悪魔の実の能力はどうですか？」

「フフ、凄いよ ありがとう、エリオ」

「いえいえ。僕はただ、愛する人のためですから」

「んも〜エリオたら」

とにかく、ラブラブな2人だった。

「そう言えば、クアット口達はどうしてるかな？」

「心配なのですか？」

「うん……。」

《?????》

スカリエツティが以前いた、研究ラボにNumbersが集結した。

目的は、レリック蒐集と生みの親であるスカリエツティを引き込んだ”雷皇”を倒す事。

更に、『聖王の純粹クローン』である”聖王”ヴィヴィオの誘拐。

「さあして、どれから始める?」

NO・?クアットロが、他の皆に提案する。

「ドクターを引き込んだ”雷皇”って奴をぶつ潰す!」

NO・?ノーヴェが、怒気を交えた声で、言った。

「”雷皇”を侮ってはならんぞ、ノーヴェ?」

NO・?チンクが、ノーヴェを制止させる。

「そうよ。なんせ、ドクターや騎士ゼストを引き込んだ大海賊だからね。」

《ミッドチルダ》

六課隊舎に『モービー・ディック号』が停泊している。

海上の警備を兼ねて、エリオやヴィヴィオの護衛が理由である。

「これが、『雷皇海賊団』……。凄い人の数だ!」

「そこまで、驚く必要があるか?」

ヴィータは、キャロの反応に、頭を傾げた。

「何しろ、船員だけで1600人以上はいますからね。」

ティアナが、さりげなく呟いた。

「1600！？そんなに人数が多い海賊団って、そう多くないわ！」

ギンガが、ティアナの発言に驚く。

実は、ゲンヤからの指令で六課へ異動となった。

「あれっ？エリオ君は？」

「エリオなら、”あいつ”の所だ。」

・
・
・

”白ひげ”の墓陵に、エリオの姿があった。

「お久しぶりです、ニューゲートさん。ヴィータ副隊長と何を話されましたか？」

エリオは、酒が入った巨大な瓢箪を墓陵に置いた。

「あれから、もう10年が経ちましたね。」

〈回想・エリオside〉

管理局の研究所に、僕は軟禁されていました。

親に裏切られた哀しみが、僕を変えてしまいました。

(一体…誰を信じたら、いいの？)

そんな事を考え始めていました。

そんな時に、僕を救ってくれたのは…ニューゲートさんでした。

「 白ひげ ” の来襲だ！ 」

「 逃げる！ 」

研究者達が、次々と逃げていきました……………
……………僕達を残して。

「 グラララ。管理局め、こんな研究所を作るとは。ん？坊主…ひでえケガじゃねえか。おい、マルコ！ 」

「 どうしたよい、オヤジ…おい、大丈夫か?! 医者を呼べ！ 」

・
・
・

「 う、うーん。 」

「気が付いたか。」

僕が、目を覚ました時。

側には、エースさんがいてくれました。

〈回想・終〉

「じゃあ、エリオはその頃から、海賊になったの？」

なのはは、義兄に尋ねた。

「いや、その時はまだなっていないかった。エリオが、零番隊隊長になったのは…ゼストを引き込んだ頃ぐらいからか。」

「騎士ゼストを引き込んだ頃から、エリオは…海賊に堕ちたのですか？」

「堕ちた…じゃねえ。エリオは、自分の意志で海賊になった。なあ、ゼスト！」

フエイトの発言に、エースは、怒気を交じる声で言った。

「ああ、当時のエリオ船長の印象なら、良く覚えている。」

「どんな印象でしたか？」

「まさに、海賊と言っても可笑しくない雰囲気纏っていた。この俺を負かした実力をあつた。俺はそれから、エリオ船長を慕うよう

になった。」

「嬉しいですよ、ゼストさん。」

「エリオ船長。もう済んだのですか？」

「オヤジと、何か話したか？」

「昔話を少し思い出しました。」

「……………」

「そう、悲しまないで下さい。僕は『四皇』の1人、“雷皇”エリオ・モンドリアルですから。」

エリオは、2人に満面の笑顔を浮かべた。

その時、はやてから

「大変や！教会の連中が来て、ヴィヴィオを攫うとしとるんや！」

との連絡が入った。

「おのれ、聖王教会め！もうこれ以上、俺は……”家族”を失いたくないえ！」

エースは、憤慨して、姪の元へ駆けつける。

「待っててね、ヴィヴィオ！」

なのはも、愛娘の元へ駆ける。

《六課・訓練場》

「聖王” ヴィヴィオ…。我々の威光が為、共に参りましょう！」

1人の修道師が、ヴィヴィオに提案する。

その修道師は、3mを超える巨漢であった。

「…お断りいたします。私には、自分が決めた生き方があります。あなた方につき従うような生き方だけは、したくないんです！」

ヴィヴィオは、提案をきっぱりと、断った。

「なら、力づくでも、来ていただきましょう。」

修道師は、大剣を抜いて、ヴィヴィオに向けて、振り降ろした。

「レイジングハート、セット・アップ！」

なのはが自分の愛機を起動して、片手で、受け止めた。

「な、なのはママ?!」

「全く…物騒な物を振り回しますね。…ふん！」

なのはは更に、受け止めた状態から、大剣を弾いた。

「っ!？」

「……………」

そして、無言で、大気を”掴む”。

「あの、構えは…!？お前ら、エースの義妹から離れるよい!」

「でも!」

「今の嬢ちゃんは…オヤジとそっくりだよい!」

「ふん!」

なのはは、その状態から大気を動かした。

すると、凄まじい地鳴りが発生した。

そう……訓練場丸ごと“傾いて”いる。

「バランスが!」

「お嬢ちゃんには、近づくな!」

「見て、ティア!う、海が…傾いているよ。」

「これが【グラグラの実】の力なの?」

暫くして、地鳴りが治まった。

「なんと、恐ろしい力よ。しかし、我々の”大義”のため、大人しく、消えてもらおう！」

修道師は、大剣を持ち、振り降ろそうとした。

すかさず、なのはが跳んで、修道師の懐に入っていた。

「なっ!?!」

「ハアア〜!」

なのはは、左拳で、大気を砕いた。

修道師に、”地震”の衝撃を直接食らわした。

修道師は、膝をついた。

「くっ!この力を我々が、見逃す訳にはいかない!必ずや、”聖王”を引き入れてみせようぞ!」

「…無駄です。」

『”霸王色”の覇気』で、修道師を気絶させる。

(なのは…。お前はもう、立派になりやがった。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2178k/>

第二次次元世界大戦

2011年9月11日05時30分発行